

近代日本版画家名覧 (1900—1945)

〈凡 例〉

- 1、作家の選択は、凡そ1900（明治33）年から1945（昭和20）年までに版画制作の記録が残る作家（アマチュアを含めて）を採録した。但し児童版画は含まない。
- 2、作家名については、典拠文献や参考文献を参照し、それ以外は一般的と思われる読みを採用した。
- 3、年記は西暦を基本として、生没年については（ ）内に元号を表記した。
- 4、作品名は《 》、書籍・雑誌・作品集などは『 』内に表記した。〔 〕内は執筆者補記を示す。
- 5、版種について、特に記載の無い作品は木版画とする。
- 6、類出する参考文献については以下のように表記する。
 - ・加治幸子編著『創作版画誌の系譜』（中央公論美術出版 2008年）→『創作版画誌の系譜』
 - ・『エッチング』（日本エッチング研究所発行／臨川書店復刻版 1991年）→『エッチング』
- 7、執筆者

井上芳子	（和歌山県立近代美術館学芸員）	岩切信一郎	（元新渡戸文化短期大学教授）
植野比佐見	（和歌山県立近代美術館学芸員）	加治幸子	（元東京都美術館図書室司書）
河野 実	（鹿沼市立川上澄生美術館館長）	滝沢恭司	（町田市立国際版画美術館学芸員）
丹尾安典	（早稲田大学文化構想学部教授）	西山純子	（千葉市美術館学芸員）
三木哲夫	（兵庫陶芸美術館館長）	森 登	（学藝書院）
樋口良一	（版画堂）		

戦前に版画を制作した作家たち (20)

【ふ】

深川好太郎 (ふかがわ・こうたろう)

1932 (昭和7) 年4月発行の版画誌『刀の跡』第5輯 (同人: 荒井東留・児玉篁・永禮孝二) に木版画《新宿所見》を発表。続く6月の第2回日本版画協会展に木版画《水門》が入選した。同協会へはその後も出品し、第3回展 (1933) に《夏》、第4回展 (1935) に《或る横丁》、第6回展 (1937) に《新開地夜景》、第7回展 (1938) に《みたま送り》、第9回展 (1940) に《鍛鋼》が入選。1944年には会友に推挙され、同年の第13回展に《舟を出す》を出品した。戦後も第15回展 (1947) に《鍛鋼場》《落日》、第16回展 (1948) に《魔窟街》《花と童女》、第17回展 (1949) に《帰路》《ぼたん》を出品したが、その後の消息は不明。戦前から東京に住み、戦後の第16回展 (1948) 出品時の住所は「東京都足立区千住曙町38」である。【文献】『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所2006) / 『日本版画協会第十六回展出品目録』(1948) / 『創作版画誌の系譜』(三木)

深澤 要 (ふかざわ・かなめ) 1904 ~ 1947

1904 (明治37) 年7月24日東京市下谷区池之端七軒町7番地に生れる。医師であった父親の転居に伴い九州で少年期を過ごす。福岡県立嘉穂中学校を病気退学し、1922年に入学した大阪泰西学館も病気退学するが、この頃から童話の研究を始める。1925年、大阪市立工業学校 (1926年に都島工業学校と改称) に勤務。傍ら童話倶楽部を立ち上げ、巡回童話会を開く。1929年、都島工業学校 (現・大阪市立都島工業高等学校) を退職し、梅田新道に行人社書店を開設するが、病のため閉店。その間『古本屋の棚』(発行者不明 1931)、『子供考』(ヤマト書房 1931)を上梓 (以上未見)。1933年には東京に移り、1934年頃よりこけしの蒐集や研究に力を入れ始め、頻繁に産地を訪問するようになる。1938年に『こけしの微笑』(昭森社) を出版。当時衰退傾向にあったこけし産業の復興に力を注ぐ。1942年に兵庫県西宮市に転居し、鉄工所を経営しながら、こけしを求めて東北地方の工人を訪ね歩き、蒐集を続けた。1946年に肺炎を発病し、1947 (昭和22) 年1月12日兵庫県西宮市津門大箇町12番地において逝去。1948年に鳴子町温泉神社境内に深澤の歌を刻んだ「こけし歌碑」が建立された。

版画関係では、1943年頃に歌集『こけしの歌』や版画集『奥羽余情』の刊行を思い立ち、版木を彫り始める。臨終には版木が完成されなかったが、深澤が遺作として刊行を願ったもので、死去した1947年に私家版として『奥羽余情』(深澤欣編) が上梓された。短歌・俳句部分の文字もすべて木版で作られている木版画集である。「はしがき」の「創作版画は愛すべく懐かしい。自分で描き、自分で刻り、自分で刷るたのしさはまた格別である。つくり出すよるこびと共につくり出す人の苦心もわかっていい」とし、続けて「こけしへの愛敬を活字の厄介にならずに、表現した」からは深澤の思いが伝わってくる。1984年に未来社から『奥羽余情 短歌・俳句・こけしかるた』(全2冊) として出版された。また、東京吉祥寺の「朴の会」が発行した版画集『むさしの風景』の創刊号に

あたる其の1 (1938.11) に木版画《深大寺山門》を発表。其の2 (1939) にも作品を発表しているが、未見のため内容は不明。「朴の会」は吉祥寺駅前通りにあった「志村書店」の店主志村浩が素人の版画好きを集めて立ち上げた版画の団体で、年賀状の交換会から始まり、年賀状作品展を開催し、版画集『むさしの風景』の発行に到った。深澤は東京に転居した折に参加したもの。出品者には版画家の織田一磨をはじめ、日本画家の塩出英雄、児童文学作家の柴野民三など、画家や文学などの文化人が多く含まれている。【文献】『むさしの風景』1 / 『版画堂目録』63 (2004.3) / 「深澤要略年譜」『羨こけし こけしの微笑・こけしの追求』(未来社 1962) (加治)

深澤索一 (ふかざわ・さくいち) 1896 ~ 1947

1896 (明治29) 年9月4日新潟県西蒲原郡吉田町に生まれる。本名作一。1912年に上京。青山に住み、東京中央商業学校を卒業。作家志望であったが、千住に暮らしていた1921年に諏訪兼紀と出会い、その作品に魅了されて木版画の制作を始める。翌年の第4回日本創作版画協会展で《静物その一》《静物その二》が初入選。同年早くも蘇生社より『一つの道 第一版画集』を刊行。最初期は諏訪らの影響下にあったがまもなく板ばかしを多用した独自の表現を開拓、静物や風景に取材して佳品を次々に生む。日本創作版画協会展では以後も入選を続け、第8回展より会友、第9回展より会員。日本版画協会展にも第1回展から会員として参加した (第2回展と第6回展を除き第13回展まで出品)。1928年の第6回展から版画室が設けられた春陽会展にも同年から参加している (以後第11回展まで及び第13回展、第20~22回展に出品)。展覧会としてはほかに1924年の詩と版画社第1回展、1926年の試作第1回作品展、後述する卓上社展、1929年の第1回三紅会展 (賛助出品)、白日会展 (1930年の第7回及び翌年の第8回展)、1930年のデッサン社第2回美術展覧会 (及び1935年の素描版画展覧会)、1930年の第17回日本水彩画会展覧会 (出品は木版画《清洲橋》)、1931年の新興版画第1回展などへの出品歴がある。創作版画興隆期の重要な作家として創作版画誌においても活躍を見せ、『HANGA』第1輯 (1924.2) や『詩と版画』第5輯 (1924.6) を皮切りに、『村の版画』『試作』『港』『版』『白と黒』『ゆうかり』『版芸術』『版画座』『飛白』など参加した版画誌は夥しい。とりわけ8輯より同人となった『詩と版画』やその後継誌である『風』『再刊風』では中心的な役割を果たしている。1930年前後には頒布会もしばしば行っており、1928年に山口久吉と組んだ「創作版画頒布会」、1929年の「深沢索一版画作品特別提供 (《果実》)」、1930年の「版画頒布会」、1931年に秋朱之介の以士帖印社から刊行した《猫と鶏頭》をあけておく。版業の頂点というべきが『新東京百景』の仕事であろう。これは1928年10月に恩地孝四郎・川上澄生・諏訪兼紀・平塚運一・藤森静雄・逸見享・前川千帆とともに8名で卓上社を結成し、同年の第1回展で「東京風景」を共通テーマに作品を発表したことに始まるが、東京の「今」を残すべく連作を発案したのは深澤であった。中島重太郎の創作版画倶楽部を版元として1932年までに百景が完成、深澤は13点を手がけたがいずれも完成度は高く、関東大震災からの復興を遂げた東京の姿をありありと伝え、なかでも《昭和通ガソリンヤ》や《柳ばし》《新宿カフェ街》《神宮球場早慶戦ノ日》は当時の創作版画を代表する佳品といえるだろう。中島との共同はその後も続き、『新東京

百景』刊行中の1929年に『邪珠蛮土』（前川・川上・諏訪と共作）、1931年に『奈良版画葉書』（5点）、1932年に『十銭版画 3号 溪流秋韻』『十銭版画 4号 花籠』、1933年に『方寸版画 武蔵野雑草』、下って1944年に青果堂から『武蔵野雑草集』（佐藤一英詩）を刊行している。また装幀でも優れた仕事を残し、早くは1924年の吉行エイスケ他編『賣恥醜文』表紙があり、1930年代には中央公論社から刊行された多くの木版装幀本に関わって彫師や摺師としても活躍している。代表的なものに1934年の十一谷義三郎『神風連』（川端龍子装幀・深澤彫摺）、1936年の林芙美子『野麦の唄：他六篇』（深澤装幀・彫摺）、徳田秋声『勲章』（深澤装幀・彫摺）、野上弥生子『妖精園』（中川一政装幀・深澤彫摺）、1938年の中川一政『顔を洗ふ』（中川装幀・深澤彫摺）、1939年の石坂洋次郎『雑草園』（深澤装幀・彫摺）がある。版画家として1930年代以降も日本版画協会と春陽会を足場に二度の国際オリンピック芸術競技出品や1935年の個展開催（日本橋一ちや盧における「深澤索一氏版画小品展」）、1939年の『新日本百景』参加（『裏富士』）など活動が続けるが、当時盛んに謳われた版画の大衆化については否定的な立場をとり、あくまでも芸術としての高みを理想とした。同時に1932年の『自選小品集 第1輯』（白と黒社刊）を節目として東洋的・文人画的表現に転じ、1944年には銀座資生堂で「深澤作一水墨小品展」を開催している。戦中の1943年に日本版画奉公会会員。戦後も1946年の第14回日本版画協会展に出品、同年の第2回日展にも出品しているが、翌1947年1月12日、50歳の若さで東京都世田谷区にて逝去した。【文献】深澤索一「版画機縁」『版画 CLUB』2-2（1930.2）／深澤索一「版画身辺語」『みづゑ』372（1936.2）／『新東京百景』（平凡社 1978）／『新潟の美術 2001 深澤索一と近代の版画』展図録（新潟県立近代美術館 2001.2）／西山純子「版画屋 中島重太郎」『千葉市美術館研究紀要 彩蓮』4（2001.3）／『大正期美術展覧会出品目録』（東京文化財研究所 2002）／岩切信一郎「秋朱之介の『以土帖（えすてる）』、川上澄生、深澤索一、棟方志功の版画頒布のことなど」『一寸』19（学藝書院 2004.8）／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前編』（東京文化財研究所 2006）／『創作版画誌の系譜』（西山）

深澤省三（ふかざわ・しょうぞう）1899～1992

洋画家で童画家としても活動。1899（明治32）年3月24日に岩手県盛岡市で生まれる。盛岡中学を経て、1918年東京美術学校西洋画科に入学し藤島武二に師事。在学中から児童雑誌『赤い鳥』の挿絵を描きはじめる。1920年の第2回帝展に《九月》初入選。1922（大正11）年からは『コドモノクニ』（東京社）創刊から参加。同年女子美学生だった四戸紅子と結婚。1927（昭和2）年には日本童画家協会（初山滋・武井武雄・川上四郎・岡本帰一・村山知義・清水良雄と共に）結成に参加。戦後は盛岡で岩手県立美術工芸学校、岩手県立大学盛岡短期大学部美術工芸科等で教鞭をとる。1964年上京。1992（平成4）年3月24日逝去。版画制作例としては、1926年の『新版画集』（新版画社、東京府下瀧の川田端六二一）巻頭に『秋花』（多色摺木版画）を発表。「大正十五年七月廿日発行」で、発行兼印刷所は同住所の「エムジヨナー事 打田英吉」とある。【文献】『20世紀物故日本画家事典』（美術年鑑社1998）（岩切）

深澤 宏（ふかざわ・ひろし）

洋画家石井柏亭らが指導する東京の文化学院専修科は1933年4月から石版や肖像画等の講習会を始める。エッチングについては第1回を10月（参加者16名）に、第2回を11月（参加者14名）にそれぞれ1週間、講師に日本エッチング研究所の西田武雄を招いて開催した。専修科に在学中の深澤は2回とも参加。それぞれの講習会で制作した銅版画が研究所機関誌『エッチング』第12号（1933.10）と第14号（1933.12）に掲載されている。第21回日本水彩画会展（1934.2.25～3.13 東京府美術館）に出品した木版画《奉天風景》を『美之国』誌上で里見悠は気のきいた作品と評している。1937年に開催された文化学院卒業生の留加会展第7回に出品した油彩画について、『エッチング』第56号（1937.6）には署名はないものの、西田筆と思える作品評「第七回留加会展を見る」には「深澤宏君はい、天分の持主だと、かつてエッチングの作品を見てそう思つて居たのだが、出品の三点ともヒドクまづい。何か考へ違ひをして居るに相違ない」と厳しい批評が記されている。このほか、第19回二科展（1932）に油彩画《奉天大東門外景》、第21回展（1934）に油彩画《ホテルの一劃》を出品。【文献】里見悠「日本水彩画会展を見る」『美之国』107（1934.4）／『エッチング』12・14・56／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』（東京文化財研究所 2006）（加治）

深水正策（ふかみず・しょうさく）1900～1972

1900（明治33）年9月28日長野県木曾郡木曾福島町に生まれる。上智大学中退後にアメリカに渡ってコロンビア大学とハーバード大学に学び、その後ヨーロッパにも渡って6年間を過したとされる。1930（昭和5）年翻訳書『チャレストンの跛人』（汎人社）を刊行。1932年4月文房堂で個展を開催し、エッチングを中心に約50点の版画を発表する。また6月に同じく文房堂で、ワルワラ・ブブノワ、中村義雄、河辺母村の4人で「素描と版画展」を開催、ギリシャ神話を主題とするエッチング20点などを出品した。黒田呵雪が「氏の感情はこまやかに洗練され審美化されたものだ。落ちついた代緒の地から浮いて来る繊巧な線の律動が夢のように音楽を奏で、居る」（『素描と版画』『みづゑ』330）と評す。1935年太平洋画会第31回展に《古代絵模様》と《リズム》2点のエッチング、その他《神話》《幻影》《巴里ノートルダム》と題する版画を出品。荻島安二と交流があり、同年の構造社第9回展に《水の幻想（歓び）》《水の幻想（哀み）》を出品。1938年伝記小説集第2輯『小さい花束』（新泉社）を出版。1954年11月小野忠重や恩地孝四郎らとともに「版画懇話会」を結成。1956年1月版画懇話会主催の第1回現代版画展を渡邊版画店で開催、以降も継続して開催した。戦後は主に児童教育の分野で活躍した。1972年（昭和47）10月14日逝去。【文献】『日本美術年鑑』昭和48年版（東京国立文化財研究所 1974）（滝沢）

落谷虹児（ふきや・こうじ）1898～1979

1898（明治31）年12月2日新潟県北蒲原郡水原町（現・阿賀野市）に生まれる。本名一男。父傳松は活版印刷業に失敗し、県内の新聞社の記者や活字工などとして働くも、文才・画才を持ちながら酒癖の為に貧しい生活を送る。1911年新発田本村尋常小学校卒業後、新津高等小学校に進むが、同年8月母エツが夭折し家族は離散。一男は新潟市内の株式仲買店や洋服店、印刷会社などに丁稚奉公

する。両親の影響で絵を描くことを好んだ一男の才能が、当時傳松が勤務していた印刷屋社長桜井市作（後の新潟市長）の目にとまり、桜井の紹介で日本画家尾竹竹坡の内弟子となり14歳で上京、竹坡のもとで4年ほど日本画を学ぶ。1913年傳松の失業で帰郷し、看板絵などを描いて家計を支える。1915年傳松が樺太の新聞社に招聘されて転住。その後傳松の病で一男も樺太に渡るが、父との離反で絵を描きながら4年間樺太を流浪後、竹坡塾先輩の彫刻家戸田海笛を頼って1919年上京。戸田の紹介で「日米図案社」に採用されポスター等を描く。翌1920年再び戸田の紹介で竹久夢二を訪ねたことが転機となる。夢二が紹介したのは当時『少女画報』（東京社）の主筆だった詩人の水谷まさるで、挿絵の仕事を与えられ、「虹児」名で『少女画報』や『婦人画報』の挿絵を描き、1921年からは「虹児」と改名し、朝日新聞連載の吉屋信子「海の極みまで」の挿絵などで「虹児」の名前が知られるようになる。また、詩人でもあった虹児は、1924年2月の『令女界』に詩画「花嫁人形」を発表、杉山長谷夫の作曲で童謡として有名となる。1925年本格的な絵画習得のためにパリに渡り、藤田嗣治や東郷青児らと交友しながら、サロン・ドートンヌやサロン・ナショナルなどに入選、雑誌『ファンタジア』などからも挿絵の注文が来るようになるが、留学途上の1930年に家庭の事情で帰国を余儀なくされる。帰国後は再び『令女界』などにモダンな画風の挿絵を描くほか、童話・絵本・装幀の分野でも活躍。1944年神奈川県足柄上郡山北町に疎開。戦後は復刊した雑誌に執筆を再開し、小学館や講談社の絵本などに挿絵を描くが、1954年映画界に転じ、「東映動画スタジオ」の設立に参加。東映動画初のカラーアニメーション映画『夢見童子』を監督、その後は監督業のほかに宣伝広告のデザインなどにも携る。1979（昭和54）年5月6日静岡県伊豆町で逝去。

戦前の版画は、『婦人グラフ』第1巻第3号（1924.7）に木版挿絵《[おん主の嘆き]》《[娘]》、金の星童謡楽譜の木版装画《夢とり》（1924）、《夢のお国》（1926）など。戦後は『虹児の画集』（美術出版 1973）に付された木版美人画2図（加藤版）や《うたたね》（1973）、《[御高祖頭巾]》（刊年不明）などがある。【文献】落谷虹児《花嫁人形》（講談社 1967）／『別冊 太陽 落谷虹児 愛の抒情画集』（平凡社 1985）／『山田書店新収目録』36・62・66・67（1999.3・2004 夏・2005 春・夏）／『版画堂目録』97（2012.9）（樋口）

福井市郎（ふくい・いちろう） 1893～1966

1893（明治26）年奈良県今井町に生まれる。大正初年頃、兵庫県の芦屋浜に移り住む。1921年第5回神戸美術展覧会に油彩画《八月》を出品。以後、第7・8回展と出品。また、1921年9月の第3回日本創作版画協会展にも銅版画《シヤボテン》が入選。以後、第4回展（1922）に《房州風景》、第5回展（1923）に《教会堂》《チューリップ》《樹》、第6回展（1924）に《自画像》を出品。また、1921年頃に角野判治郎・今井朝路らと神戸の洋画家グループ「コルボオ」を結成する。1922年には神戸弦月画会主催の創作版画展覧会に、川西英・北村今三・春村ただをらと参加し、銅版画《房州風景》《シヤボテン》を出品。1924年の詩と版画社第1回展にも銅版画《裸女》《風景》《花》を出品する。1925年に渡仏し、翌26年のサロン・ドートンヌに油彩画《自画像》《アルプス山小屋》が入選。1928年に帰国し、同年の第7回国画創作協会展に滞欧作《山小屋の夕

べ》《マルセーユ風景》など油彩画5点を出品した他、福井市郎個展（銀座・資生堂ギャラリー）を開催し、滞欧作の油彩画《アンギヤン風景》《モンマルトル風景》など30点を展示する。翌1929年には川西英・北村今三・春村ただをら・菅藤霞仙と「三紅会」を結成。6月に第1回展を開催し、銅版画《窓（巴里にて）》など3点を出品。以後、1936年の第6回展まで欠かすことなく出品した。また1935年には三紅会版画講習会を三紅会会員とともに開催したが、神原浩と銅版画の指導にあたり、同時に神原とともに『エッチングの大意』を執筆するなど、銅版画の普及にも尽力した。1929年の第4回国画会展に油彩画《朝顔》《ビルフランシユにて》を出品し、絵画部の会友に推挙された。その後、第5回展（1930）に油彩画《丸ノ内風景》、1931年の第6回展に油彩画《花》など4点と銅版画《窓》など3点、第7回展（1932）に油彩画《果実》など5点と銅版画《水泳大会》《曲線》を出品。以後、1935年の第10回展に出品するも油彩画のみで、版画の出品はなかった。1930年に兵庫県美術家連盟創立に参加し、翌1931年の第1回展に油彩画《アルピニスト》《緑衣婦人像》を出品。その後、第3・5～8回展に出品した。同1931年には『福井市郎 近作洋画撰集』を出版。1933年には神戸画廊で福井市郎小品展を開催。1935年に兵庫県武庫郡精道村芦屋（現・芦屋市）六麓荘に転居し、自宅で画廊「神戸絵画館」を主宰する。1937年に神原浩・福井市郎エッチング展を大阪で開催。1939年には神戸絵画館で個展を開催。戦後は神奈川県湯河原で暮らし、1966（昭和41）年1月31日同地で逝去。【文献】金井紀子編「第4章 福井市郎年譜」『川西 英と神戸の版画—三紅会に集まった人々』展図録（神戸市立小磯良平記念美術館 1999）／『今純三・和次郎とエッチング作家協会 採集する風景／銅版画と考現学の出会い』展図録（渋谷区立松濤美術館 2001）（河野）

福井敬一（ふくい・けいいち） 1911～2003

1911（明治44）年7月10日台湾の台北に生まれる。本籍地は和歌山県和歌山市。1931年同舟舎洋画研究所に学ぶ。1932年帝国美術学校西洋画科に入学。翌年の第7回台湾美術展（主催：台湾教育会）に油彩画が入選。その後も出品か。1935年5月には、台北で立石鐵臣・西川満・宮田弥太郎らによって結成された「創作版画会」に参加。誌上展として計画された『媽祖』第5冊（1935.7 媽祖書房 編輯兼発行人：西川満）に木版画《裸婦》を発表したが、その後の版画の発表は未確認。翌1936年の中央美術展、第2回新興美術家協会展に油彩画が入選。続く1937年の第12回国画会展へは油彩画《午後》《卓上》を出品し、褒状を受賞。翌年の第13回展も褒状を受賞した。出品時は「本郷区駒込千駄木町49」に住む。1939年帝国美術学校西洋画科を卒業し、浅草の花月劇場に勤務。卒業後も国画会展へ出品を続け、1943年の第18回展で会友に推挙され、戦前は第19回展（1944）まで出品。またその間、1940年の第4回海洋美術展、紀元2600年奉祝美術展にも出品している。その後、1945年の東京大空襲で全作品を焼失。戦後も国画会展を中心に作品を発表。1950年の第24回展で会員に推挙され、2000年の第74回展まで出品。一方、1951年より学校法人トキワ松学園の図画教諭として勤務（～1965）。1966年トキワ松学園女子短期大学絵画科教授（～1990）、1990年同校名誉教授となる。また、1953年からは武蔵野美術学校（現・武蔵野美術大学）の西洋画科講師（～1990）や長野県須坂の美術

教員の団体である「上高井教育会美術同好会」の講師（～1990）となり、後進の指導や地域の美術指導にもあたった。2002年長野県須坂市に作品600余点を寄贈。2003（平成15）年12月15日東京都新宿区で逝去。翌2004年の第78回国展に遺作《藤》が展示された。【文献】「福井敬一画伯略歴」（須坂市提供 2018）／西山純子「華麗島の創作版画——一九三〇年代・台湾——」『採蓮』7（千葉市美術館 2004）／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』（東京文化財研究所 2006）／『会員名簿』（帝国美術学校校友会 1940.10）（三木）

福岡慶象（ふくおか・けいぞう）

青森の佐藤米次郎が発行した『サトウ・ヨネジロー蔵書票集 [第3年] 第2集 夏の集』（青森創作版画研究会 夢人社 1936.8）に《門外不出》を発表。【文献】『サトウ・ヨネジロー蔵書票集 [第3年] 第2集 夏の集』／『緑の樹の下の夢—青森県創作版画家たちの青春展』展図録（青森県立郷土館 2001.10）（加治）

福岡基善（ふくおか・もとよし）

1934・35年頃、青森市栄町で彫刻刀など木工関係の道具を扱う店「手工社」を営んでいた川口稔は、郷土の手工芸教育に熱心であった。小学校での手工芸教育における版画の有効性をあげ、手工芸を生活手段の一助とするために、創作版画を広めたいとの意向をもっており、1935年頃に版画誌『不那の木』（刊年不明 1・2集未見）を発行。福岡はその第7集 [1935?] に《蔵書票》（版画脱落のため未見）、第8集 [1935?] に《蔵書票》を発表する。7集は「元善」の名で、8集は「基善」と表示されており、ここでは第8集に使用されている「基善」を採用した。【文献】『緑の樹の下の夢—青森県創作版画家たちの青春展』展図録（青森県立郷土館 2001.10）／『創作版画誌の系譜』（加治）

福澤武司（ふくざわ・たけし）

1930年代の静岡では『かけたつぼ』（1930～1934 全23冊）、『ゆうかり』（1931～1935 全30冊）といった版画同人誌が発行されるが、その中でも1932年11月には真澄忠夫らによって個性豊かな版画誌『版画座』（1932～1934 全16冊）が創刊された。福澤はその第1輯（1932.11）に《面》《田舎道》、第2輯（1932.12）に《豚》を発表。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

福島水葉（ふくしま・すいよう）

1918（大正7）年1月に「水葉版画展覧会」（3日前橋図書館 後援：上州新報社文藝部）を開催し、40数点を出品。井上芳子氏によれば、本名は福島臨作。「彩鳥」とも号し、桐生の織物図案家であったという。【文献】『中央美術』4-3（1918.3）／『みづゑ』157（1918.3）／井上芳子氏メモ（三木）

福島つね子（ふくしま・つねこ）

橋本興家の推薦で、武井武雄主宰の版画賀状交換会「榛の会」（50名限定）に第10回から13回（1945～1947）まで参加。当時の住所は「東京都目黒区鷹番町192」。榛の会の運営に協力的で、紙や官製葉書などを何百枚単位で寄贈したという。【文献】「第10・12・13回榛の会会員 [名簿]」／市道と豊『「奇蹟の成立」榛の会昭和21年—芸術集団の戦中・戦後—』（室町書房 2008）（樋口）

福島常作（ふくしま・つねさく） 1915～没年不詳

1915（大正4）年青森市に生まれる。1932年青森中学校を卒業し、青森市役所に勤務。1937年には市役所を退職し、青森県庁に入庁。1970年に青森県立郷土館設立準備室長になり、1973年には定年退職するも、その年発足した郷土館副館長に、1975年には財団法人棟方志功記念館副館長に就任する。中学校在学時に佐藤米次郎・根市良三・柿崎卓治が創刊した青森最初の版画誌『緑樹夢』の第2号（1930.9）に《農園》、第3号（1931）に《或る教室》《打ちよせる波浪》を発表（創刊号は未見）。市役所に勤務する傍ら版画を制作し、『緑樹夢』を引き継いだ版画同人誌『彫刻刀』（1931～1932 全17冊）の第1号（1931.6）の《晩秋夕景》《流浪の失業者》をはじめとして、第9号を除いて毎号に作品を発表。その後、『彫刻刀』が改題され『陸奥駒』（1933～1935 全20冊）となるが、その第1号（1933.1）に《新春の写》を発表し、第20号まで継続して作品を発表する。1934年に発行された版画誌『あをもり』は現在第1・2・4号（1934）の3冊が確認されているが、これらにも小品の木版画を発表。さらに佐藤米次郎が発行した『趣味の蔵書票集』第1～5回（1936.9～1940.11）に蔵書票を発表する。『陸奥駒』の継続誌『青森版画』（1939 全2冊）の創刊号（1939.2）に《さしとり草》、第2号（1939.5）に《風景》を発表し、創刊号には「発刊の喜び」と題して青森の版画同人誌を振り返り、版画復活にとって「大いなる喜びと共に意義深き事だ」と記している。これらの版画誌は在住の青森で発行されたものであるが、福島はそれ以外にも東京の料治熊太が発行した版画誌『版芸術』（1932～1936 全58冊）の第9・15・21・27号にも木版画作品を発表している。1935年頃にはエッチングの制作も行い、第5回東奥美術展（1935.10.17～20 青森市公会堂ほか）に銅版画《堤川風景》を出品する（「同人消息」『陸奥駒』19 1935.10）。なお、第4回展（1934.10.14～17 青森市公会堂ほか）にも《自画像》《M氏の像》《蔬菜》を出品しているが、版種など詳細は不明。福島は学生時代から一貫して版画制作に励み、1961年には『福島常作版画作品集：青森県とところどころ』（私家版）を上梓（未見）。版画制作以外でも、歌を詠み、随筆など文章にも才能を発揮しており、『歌集 ちぎれ雲』『八甲田山』など著作も多数上梓。没年は不詳。【文献】『東奥年鑑』昭和10年版、昭和11年版（東奥日報社 1935・1936）／福島常作『私の青森から』（北の街社 1978）／『緑の樹の下の夢—青森県創作版画家たちの青春展』展図録（青森県立郷土館 2001.10）／『創作版画誌の系譜』（加治）

福田信二（ふくだ・しんじ）

1929（昭和4）年八木澤英三・近藤雅平・福田の3人は横浜において版画同人誌『きくづ』（1929～1931）を創刊する。刊行の確認されているものは第2号（1929.12）から第2巻3号八木澤英三追悼号（1931）のうち7冊と増刊号『きくづアルバム』『羽子板双紙』の全9冊である。当時、教師の集まりによる版画同人誌が多い中、『きくづ』を構成しているメンバーは会社社長の福田をはじめ、会社員・医者・編集者などの職業を持つ、今で言う日曜版画家たちであり、版画家で英語教師の川上澄生も参加している。福田は第2巻1号一周年記念号（1931.1）に『きくづ』が堂々2年目の春を迎へたと云うことは我々何とも嬉しくて仕様がな。幾多の傑作を蔵して十何冊かの『きくづ』が床の間に鎮座ましましてゐるのを朝な

夕な眺めて悦に入っているのもいゝ気持ちだ」と記している。作品は『きくづ』第2号に《静物》など5点（未見）、第3号（1930.1）に《コップ》《幸ビル》、第6号（1930.4）に《盃》《花》と表紙絵、第8号（1930.6）に《三原山》《品川沖にて》、第10号（1930.8）に《オヤヂになった彼》、第2巻1号（1931.1）に《子供》《瓢箪の図》《花のある静物》、第2巻3号（1931）に《芝居》《花》を発表。1930年1月の増刊号『羽子板双紙』には木版画と文の《はしごのぼり》、2月に発行された『きくづアルバム』には同人それぞれの自画像を木版画にしており、福田は横顔の自画像を披露している。当時、東京市牛込区納戸町38に在住。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

福田翠光（ふくだ・すいこう） 1895～1973

1895（明治28）年4月30日京都市に生まれる。1913年京都市立美術工芸学校図案科を卒業し、高島屋美術部に勤務する。1925年西山翠嶂の青甲社に入塾。第7回帝展（1926）に《鷺図》が初入選し、以降は帝展・新文展等に出品する。1941年青甲社を退塾、無所属となる。戦後は1949年から日展・新日展等に出品を続ける。1958年からは徳岡神泉に師事。「鷹の翠光」として知られ、花鳥画を得意とした。1973（昭和43）年1月24日京都市で逝去。版画の制作は、《牡丹》（1936）、《鷺と福寿草》（1938）（いずれも芸艸堂版）や京都の新進日本画家22名を集めて刊行された『新進名家花鳥画集』（マリア画房 1931～1933 全36図）に《鶏頭》、麻田弁次・大野麦風らと共作の木版画集『日本の花』（刊年不明 全6図）に《牡丹》などの一枚摺木版画と『三十六歌仙』（芸艸堂 1936 2冊）、『福田翠光自選 鷹篇』（現代名家素描集第9輯 芸艸堂 1941）などの木版摺画集が知られる。【文献】『新進名家花鳥選』上・下巻（榊マリア書房 1987）／『東京国立近代美術館所蔵品目録 版画』（1993）／『京都古書籍・古書画資料目録』6（2005）（樋口）

福田宗太郎（ふくだ・そうたろう）

川上澄生が英語教師をしていた栃木県立宇都宮中学校（現・県立宇都宮高等学校）の生徒が川上の版画欲しさに発行した版画誌『刀』第11輯（1931）に《静物》を発表する。1935年に同校を卒業。【文献】『版画をつづる夢 宇都宮に刻まれた創作版画運動の軌跡』展図録（宇都宮美術館 2000）／『創作版画誌の系譜』（加治）

福田展子（ふくだ・のぶこ）

1935年、兵庫県の芦屋では版画への理解とその普及をめざして「西日本新版画制作普及協会」が創設され、その機関誌として趣味の版画研究誌『西日本新版画』が発行された。その第2年1輯（1937.3）に《象（玩具）》、第2年3輯（1937.12）に《馬（玩具）》を発表。現在『西日本新版画』（1936～1938）は第1年2輯～3年2輯のうち6冊を確認している。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

福田眉山（眉山）（ふくだ・びせん） 1875～1963

1875（明治8）年9月5日兵庫県赤穂郡相生に生れる。名は周太郎。字は有慶。「麥仙」を号としたこともあったが他に「草雲」「富華堂」の号もある。多くは「眉山」あるいは「眉仙」を使用。16歳で上京し久保田米仙に師事。国民新聞社で働きながら苦学、絵画修業につとめた。1896年以来、絵画共進会に出品（第1回・2回展で三等褒賞）。東京美術学校に入るが三年次の1900年に中途退

学。同年からの日本美術院との連合絵画共進会では6回連続一等褒状、二等褒状を受ける。日本美術院に学び橋本雅邦らに激励される。他に第5回内国勲業博覧会などでも受賞し、国画玉成会会員、二葉会及び美術研精会評議員などを歴任。1909年9月から1911年6月までの3年、中国各地を旅し、その成果として、各地の風景を写生（玻璃版、木版多色版）したものと写生地の説明を付した画文集『支那大観』揚子江巻、黄河巻の二巻、全2冊（金尾文淵堂 横菊倍版 1916）を刊行し、挿画の木版は彫を岡田清次郎、摺を西村熊吉が担当した。1914年院展第1回展に《群壺》を出品し好評を得て、日本美術院で活動。1921年に朝鮮半島、1924年にも中国を旅して水墨画・淡彩画に描き「支那旅行家」としてしられた。昭和前期は「東京市赤坂区青山高樹町」に住んで居た。中国旅行での大成であった「中国三十画卷」を戦災で焼失し、戦後再チャレンジして十年かけて「中国絵巻」30巻を完成した。版画には京都版画院から《日本三景》3点を出版（1949年4月の全日本木版画展に出品）。1963（昭和38）年10月28日兵庫県芦屋市で逝去。【文献】『文学美術人名辞書』昭和5年初版（立川文明堂 1930）／『日本美術院百年史』4（日本美術院 1994）（岩切）

福田平八郎（ふくだ・へいはちろう） 1892～1974

1892（明治25）年2月28日大分市に生まれる。号は素僊・九州。1910年京都市立絵画専門学校別科に入学するも、翌年京都市立美術工芸学校絵画科に入学し直し、1915年卒業後、再度京都市立絵画専門学校に入学。1918年卒業。在学中、文展第10回展から12回展に入選、以後、帝展・新文展、戦後は日展を中心に制作活動を行う。京都日本画壇の重鎮であるが、従来の日本画と一線を画し、《漣》《筍》《新雪》《雨》等の単純化された独自の画風を確立する。1930年中川紀元・木村莊八・牧野虎雄・中村岳陵・山口蓬春、編集者の外狩素心庵・横田毅一郎等と美術研究会「六潮会」を結成し、1940年まで活動する。1936年六潮版画第1輯「風」（三味堂）が出版され、多色木版《西風》を発表する。1961年文化勲章を受章。1974（昭和49）年3月22日京都で逝去。【文献】『日本美術年鑑』昭和49・50年版（東京国立文化財研究所 1976）（森）

福田善雄（ふくだ・よしお）

1932（昭和7）年4月の第10回春陽会展に木版画《静物》、6月の第2回日本版画協会展に木版画《静物》を出品。その後の活動は不明であるが、1943年5月の「日本版画奉公会」の結成に参加。参加時の住所は「豊島区池袋2ノ952」とある。【文献】『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』（東京文化財研究所 2006）／「日本版画奉公会会員名簿」『エッチング』124（三木）

福田義之助（ふくだ・よしのすけ） 1890～1959

1890（明治23）年茨城県土浦に生まれる。三宅克己に水彩画、藤島武二に油彩画を学ぶ。1913年土浦で「紅爛社」を組織。1914年の第8回文展に水彩画《日の出前》が初入選。1920年の第2回日本創作版画協会〔大阪〕展に木版画《公園の一隅（一）》《公園の一隅（二）》《自画像》が入選。出品時は東京に住む。以後の版画制作については不明。1922年の第3回中央美術展、平和記念東京博覧会に出品。1928年の第9回帝展に油彩画《静物》が入選。出品時は関東州大連に住む。同年渡仏。1929年の第10回帝展に《セーヌ河の雨》が入選。翌年帰国か。1930年6

月に大連で「満洲洋画研究会」を開設。同年の第11回帝展に《南欧の古村》が入選。以後、第12・15回展(1931・1934)に入選。また、1938年の第1回満洲国美術展(新京)にも出品。第4回展(1941)まで出品するもその後は不明。1942・1943年頃は「関東州美術協会」の協議員を務めている。1942年海軍報道班としてフィリピンに従軍。その後、1943年の第20回白日会展に出品。会員に推挙され、翌1944年の第21回展に南方風物作品25点を特別陳列。戦後も白日会展を中心に活躍し、1946年の第22回展から1958年の第34回展まで出品する一方、日展にも1948年の第4回展から1956年の第12回展まで出品。その間、第8回日展(1952)に出品した《楼門》で特選・朝倉賞を受賞。第9回展(1953)は無鑑査、第10・11・12回展(1954～1956)は出品依頼となった。また、1948年の第1回茨城県美術展には委員として出品している。1959(昭和34)年1月29日茨城県土浦市で逝去。3月の第35回白日会展に遺作14点が並んだ。【文献】『茨城県近代美術館所蔵作品図録 1997』(茨城県近代美術館 1997)／飯野正仁編『<満洲美術>年表』(私家本 1998)／『白日会展総出品目録<第1回～第59回>』(白日会 1984)／『日展史料I』文展・帝展・新文展・日展 全出品目録 明治四十年～昭和三十三年(社団法人日展 1990)／『大正期美術展覧会出品目録』(東京文化財研究所 2002)／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006)／『東京・ソウル・台北・長春―官展にみる近代美術』展図録(福岡アジア美術館ほか 2014)(三木)

福富 實(ふくとみ・みのる)

栃木県に生まれる。1929(昭和4)年東京美術学校西洋画科に入学。1931年に開かれた西洋画科3年生による第1回クラス洋画展(5.29～6.1 銀座・資生堂ギャラリー)に油彩画《郊外風景》を出品。1934年同校油画科を卒業。1939年の第14回国画会展に木版画《石家荘郊外》が入選。出品時は「東京市王子区稲付西町1ノ50」に住む。翌1940年の第9回日本版画協会展にも木版画《傷兵》《風景》が入選した。その後の活動は不明であるが、1972年頃は栃木県立栃木高等学校に勤務し、栃木県栃木市境町に住む。【文献】『第十四回国画会展覧会目録』(1939)／『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇 第三巻』(ぎょうせい 1997)／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006)／『資生堂ギャラリー七十五年史 一九一九～一九九四』(求龍堂 1995)／『同窓生名簿 東京美術学校 東京芸術大学美術学部 東京芸術大学大学院美術研究科 昭和47年版』(1972.12)(三木)

福留義介(ふくとめ・ぎすけ)⇒福留章太(ふくとめ・しょうた)

福留章太(ふくとめ・しょうた) 1912～1988

1912(大正元)年12月3日高知県土佐郡江ノ口町(現・高知市)に生まれる。本名「五郎」。1952年より山崎姓となる。幼少の頃、南画に親しんでいた父親から絵の手ほどきを受け、少年期を神戸で過ごす。神戸市立北神商業学校卒業。1933年東京美術学校油画科予科に入学。1934年本科に進み、南薫造教室に学ぶ。1936年同級の萩原英雄・杉原正巳(当時は石川姓)・日向裕・石原寿市と「啞地会」を結成。この頃から同校臨時版画研究室で加藤太郎・杉原・若松光一郎らと共に同研究室木版部嘱託の平塚運一から指導を受ける。また1938年石原・加藤・杉全らとシュールレアリスム傾向のグループ「貌」の結成に

参加。グループ「貌」は1939年にかけて4回の展覧会を開催するが、福留の出品は第1回展のみで、同人誌『JEUX D' ESPRIT』(1938.4～1939.4 全8冊か)の第6号には「1938年1月29日 福留当分休会決定」と記されている。1938年同校卒業後は国展を中心に発表を続け、1940年第15回展に「福留義介」名で油彩画《真鶴風景》が初入選、1943年第18回展には「福留章太」名で《風景》《蓮》を出品し褒状を受ける(この頃より「章太」名を使用)。1943年応召され、満州に配属となる。復員後は兄の疎開先の鳥取県三朝町に移り住み、その後1947年に倉吉市に転居。以後は同地で「砂丘社」に所属しながら制作を続け、1949年国画家会員となる。1971年から1986年まで鳥取女子短期大学幼児教育科教授を務めた。1988(昭和63)年11月4日逝去。【文献】『日本美術年鑑』平成元年版(東京国立文化財研究所 1990)／『グループ「貌」とその時代展』図録(郡山市立美術館 2000)(樋口)

福興英夫(ふくよ・ひでお) 生年不詳～1945

童画家。戦前、子供向け雑誌『綴り方倶楽部』(千葉春雄主宰 東苑書房)の表紙絵や『コドモノクニ』などに童画を描く。武井武雄の門弟で、武井主宰の賀状交換会「版交の会」(第3回からは「榛の会」と改称)に第1回(1935)から第10回(1944)まで参加。当時の住所は「世田谷区上北沢1-95」。1945年2月インドネシアモルッカ諸島にある小島ハルマエラ島で戦病死した。【文献】「第1・第2回版の会/第3～10回榛の会会員〔名簿〕」／関野準一郎『版画を築いた人々』(美術出版社 1976)／市道和豊『奇蹟の成立]榛の会昭和21年―芸術集団の戦中・戦後―』(室町書房 2008)(樋口)

藤井和郎(ふじい・かずお)

東京の料治熊太は多くの版画誌を発行したが、そのうちの版画同人誌『白と黒(第一次)』(1930～1934 全50冊)第6号(1930.9)に《朝顔》を発表する。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

藤井清司(ふじい・きよし)

1939(昭和14)年の第8回日本版画協会展に木版画《旋律》が入選。出品時は名古屋に住む。【文献】『第八回版画展目録』(日本版画協会 1939)(三木)

藤井達吉(ふじい・たつきち) 1881～1964

1881(明治14)年6月6日愛知県碧南郡棚尾村(現・碧南市)に生まれる。小学校卒業後は木綿問屋に奉公。その後、台湾で長兄安二郎の雑貨商の手伝いなどを経て、美校への進学を希望するが経済的事情から断念し、名古屋の「服部七宝店」に就職、七宝の技術や図案・陶磁器についての知識を深める。1905年6月から12月にかけてオレゴン州ポートランドで開催の「ルイス・クラーク100周年記念万国博覧会」への出陳とオークション開催のために渡米(土生和彦「アメリカからの手紙―藤井達吉の渡米に関する報告―」による)。ボストン美術館などを訪れ、東西の美術に触発される。帰国後、同店を退社し、七宝作家として生計を立てながら画家を目指して上京する。1910年日本美術協会主催第1回懸賞図案に応募し3等賞を受賞。1911年当時東京美術学校校長の正木直彦の呼びかけで「工芸の革新」を目指して発足した「吾楽会」に会員として招かれ、また高村光太郎の画廊「琅玕洞」に茶道具・土瓶などの工芸品を出陳。この頃津田

青楓・碓伊之助らを知る。1912年「ヒュウザン会」創立に参加、同年の第1回ヒュウザン会展にただ一人工芸作家として刺繍壁掛を出品（1回展のみ）。東京美術学校日本画科出身の若手日本画家、広島梶甫・川路柳虹らが作った「行樹社」の第1回展にも参加。1913（大正2）年黒田清輝らが中心になって分野を超えた美術団体の設立を呼びかけて創立された「国民美術協会」の創立に参加、同年の第1回西部展覧会に《銅打出屏風》を出品するなど、初期の七宝から陶芸・象嵌・刺繍・木彫・金工・屏風など多彩な技法を駆使した作品を制作し新進工芸作家として認知される。また図案と制作の分業が前提の旧来の工芸にたいして、制作者自身の図案と手による自由で創作的な工芸を提唱し、1918年津田青楓・津村信夫らと文展への工芸部門新設の運動を展開（1927年第8回帝展で第4部美術工芸が設置される）。1919年岡田三郎助や若手の工芸作家らが集まって創立した「装飾美術協会」や1925年高村豊周が中心となった「无型会」創設にも参加。无型会の機関誌『工芸時代』や婦人向けの雑誌『主婦之友』誌上で「図案の刷新」「家庭手芸」などについて啓蒙的な活動を行う。1923年『家庭手芸の製作法』（主婦之友社）を出版する。この間、長田幹彦『霧』（九十九書房1914）、夏目漱石『行人』（大倉書店1916）、木谷蓬吟『大近松全集』（大近松全集刊行会 1922）などの装幀も手掛け、絵画は独学で明治末から大正にかけて油彩画（多くは焼失）、大正後期から昭和にかけては日本画を制作する。

『藤井達吉物語』（碧南市教育委員会 碧南市史料別巻3 2006）によると、1910年上野桜木町に移り住み、同町に居住のバーナード・リーチを知る。リーチから「エッチング」や「陶芸」を学んだというが、藤井のエッチング作品は未見。同じ頃に高村光太郎、後に弟の豊周などとも親交する。その頃油彩画・版画・工芸作品といった「小芸術」と呼ばれる作品の発表展示場として登場してきた「琅玕洞」（神田淡路町）、「三笠美術店」（銀座）、「流逸荘」（神田小川町）、「兜屋画堂」（神田）などいわゆる「小美術店」での美術工芸作品の発表あるいは相談役としても活動する。とりわけ「三笠美術店」では展示作品の選定や機関誌『藝美』（全5冊）の発行編集にも関わり、第1号～第3号（1914.5～7）の表紙絵を「自刻」の木版画で飾るほか、京都の佐々木文具店から封筒用短冊形の木版画や神戸・山口久吉が発行していた版画誌『HANGA』の第4輯（1924.12）に木版画《枯のげし》を制作。また郷里棚尾村の永井寶水（ながい・ひんすい）発行の俳誌『アオミ』（1921.7～1942.11 全189冊）に1923年5・6月合併号から1939年12月号まで116冊に碧南の風景・風俗・草花・壺などを題材にした表紙絵（30図柄）や扉絵を提供。《濱昼顔》《碧海》《海の幸》などの自刻木版（「自画並刀」と記載）、《無題（魚図）》《双魚図》の自刻自摺木版、《無題（月図）》《籠の落とし子》などの石版刷（平版）作品を手がけ、『みづゑ』239号〔版画号〕（1925.1）に「版の味」を寄稿するなど創作版画にも一時期関心を示す。更に1926年には手芸用アルス染料などを広めるためにみやこ染本舗桂屋の依頼で木版図案集『芋版と臍縷の文様』（46図）を刊行。1933年文雅堂から刊行の染色と織物のための木版図案集『創作染織図案集』（全50葉 山岸主計刻 西村熊吉摺）では、愛知の寒村小原村（現・豊田市）で古くから生産されていた「小原和紙」を特注で漉かせて使用するなど「紙」への強いこだわりを見せ、1938年自ら工夫した小原和紙を使って4年の歳月をかけ肉筆図案集『路傍』（50図、50

部）を制作している。

大正期には中央画壇で精力的に活動した藤井だが、昭和に入ると公募展やグループ展などからは次第に離れ、後進の育成と地場産業の発掘育成の活動に重きを置くようになる。1929年から1937年まで帝国美術学校（現・武蔵野美術大学）図案工芸科教授を務めたほか、1930年以降瀬戸で若手の陶器家の指導や小原で漉き込み和紙の指導を行うなど郷里愛知との関係を深め、1945年3月空襲を逃れて小原に疎開。戦後も同地で制作を続け、その後は碧南、沼津、岡崎へと移り住みながら、晩年は墨絵による『四国遍路』シリーズや《扇面流し》などの意匠的な作品を遺した。1964（昭和39）年8月27日岡崎市で逝去。【文献】山田光春『藤井達吉の生涯』（風媒社 1974）／『碧南出身の人物伝 藤井達吉物語』（『碧南市史料別巻三 碧南市教育委員会 2007』）／『大正イマジユリィ』6（特集大正の「小美術店」）（大正イマジユリィ学会 2010）／『藤井達吉の全貌－野に咲く工芸・宙を見る絵画』展図録（宇都宮美術館ほか 2013）／石川博章『しこくささきぬ』（人間社 2017）／土生和彦「アメリカからの手紙－藤井達吉の渡米に関する報告－」『研究紀要』4（碧南市藤井達吉現代美術館 2017.3）（樋口）

藤井日出子（ふじい・ひでこ）

東京の料治熊太は多くの版画誌を発行したが、そのうちの版画同人誌『白と黒（第一次）』（1930～1934 全50冊）第6号（1930.9）に《叔父ちゃん》を発表。記載はないが小学生の作品と見られる。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

藤内貞樹（ふじうち・さだき）

大分県師範学校に在学中、図画教師武藤完一が主宰した版画同人誌『九州版画』（1933～1941）の第12号（1936.12）に《大分城》を発表。その翌年開催された第3回の別府市教育会主催のエッチング講習会（講師：西田武雄 別府市北小学校 参加者27名）に参加し、その時制作した大分城の門を描いた銅版画が西田主宰の研究所機関誌『エッチング』第58号（1937.8）に掲載されている。そこには「大分県師範学校5年 藤内直樹」と表示されているが、「直樹」は誤植。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

藤岡健一（ふじおか・けんいち）

大分県大野郡では郡下の小学校教員生野正義が中心となって大野版画協会を設立し、版画同人誌『大野版画』（1933～1934 全4冊）を発行した。その第4号（1934.7）に《木の芽》を発表。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

藤岡弘水（ふじおか・こうすい）

大分の武藤完一が発行した版画同人誌『九州版画』第1号（1933.9）に《九州山脈》を発表。『九州版画』（1933～1941 全24冊）は1933年8月、大分県師範学校における第2回版画講習会（講師：平塚運一）を契機にそれまで発行していた版画同人誌『彫りと摺り』を改題したもので、藤岡もこの講習会に参加。後日、平塚から送られてきた作品評では「鮮やかな絵でよろしいが、白と線は何となく力がない」と記されている。また、大分県大野郡では小学校教員生野正義を中心に大野版画協会が設立され、版画同人誌『大野版画』（1933～1934）が発行された。その第1号（1933.12）に《風景》、第2号（1934.2）に《犬〔賀状〕》、第4号（1934.7）に《小品》を発表。当

時、藤岡は大野郡で小学校の教職に従事していたと考えられる。なお、『九州版画』第1号の《九州山脈》と『大野版画』第1号の《風景》はタイトルが違っているものの、同一作品である。【文献】池田隆代「大分県における創作版画誌」『大分県立芸術会館研究紀要』1（2002.9）／『創作版画誌の系譜』（加治）

藤木喜久麿（ふじき・きくまろ） 生年不詳～1961

1916（大正5）年8月「ふじき美術店」（神田）を開く。1919年の第1回日本創作版画協会展に《曲芸の女》、翌年の第2回展に《山》を出品。また、神戸の版画誌『HANGA』第4輯（1924.12）に《島の女》を発表。一方で、橋口五葉が版画制作をおこなっていた大正期の赤坂居住時代に、五葉の没年（1921年）まで、橋口五葉のもとで助手的な手伝い仕事をしてきたとのこと（五葉遺族からの伝聞による）。例えば、五葉の《手拭持てる女》は五葉最期の版画作品だが、五葉が病床から指示を出し、それを藤木が受けて摺師に伝えて完成した遺作である。五葉没後は「五葉の弟子」を自称していたとのこと。以後に就いては「藤木喜久麿」が同名同人だとしての仮定だが、（事情は不明だが）、渋沢敬三の許に身を寄せてアチックミュージアムの活動に関与して民俗関係資料の調査・研究に携わったらしい。没年はデジタル版『渋沢栄一伝記資料』（渋沢栄一記念財団）を参照した。【文献】『みづゑ』139（1916.9）／『大正期美術展覧会出品目録』（東京文化財研究所 2002）／『創作版画誌の系譜』（岩切）

藤澤信二（ふじさわ・しんじ）

1937（昭和12）年に開かれた「大垣美育協会エッチング講習会」（7.17～18 大垣高等女学校 講師：西田武雄）に参加。その時の作と考えられる銅版画《〔卓上静物〕》の図版が『エッチング』第58号（1937.8）に掲載された。参加時は大垣市北小学校に勤務。【文献】『エッチング』58（三木）

藤沢龍雄（ふじさわ・たつお）

日本画家と思われるが詳細は不明。1928年8月に、商業美術家多田北鳥が「大衆のための美術」を提唱し、図案家14名・印刷技術者19名によって「実用版画美術協会」が結成されたが、作家側同人として参加。1929年に開催された第1回展（12.7～12 上野・松坂屋）に参加し、《酒ポスター》などを出品。1930年代後半から1940年代前半にかけて「舞い」「美人」など題材の版画を制作していたらしいが未見。1943年刊行の木版画《鏡獅子（舞踏の巻）》のみ確認。【文献】『美之國』6-1（1930.1）／『美術新論』5-1（美術新論社 1930.1）／『浮世絵と現代版画』25（菟堂 1989.12）／Helen Merritt and Naoko Yamada『Guide to Modern Japanese Woodblock Prints: 1900 - 1975』（University of Hawaii Press 1995）（樋口）

藤島武二（ふじしま・たけじ） 1867～1943

1867（慶応3）年9月18日薩摩藩士藤島賢方の三男として鹿児島に生まれる。幼名猶熊。幼少時代から絵を描くことを好んだ。1875年に賢方が亡くなり、1877年西南戦争に際し兄二人が西郷軍に参加、負傷が原因で亡くなり家督を相続する。1883年四条派の絵師平山東岳に日本画を学ぶ。1884年洋画を学ぶために上京し、神田の英語学校に学ぶ傍ら、4月第2回内国絵画共進会に日本画《漁樵問答》《南天ニ鳥》が入選。1885年再上京し川端玉章

門に学ぶ。この頃曾山幸彦から洋画の手ほどきを受ける。1886年東京仏蘭西語学校に入学、1888年まで在校する。1887年東洋絵画共進会に日本画《設色美人画》を出品し、褒状一等を受ける。その一方で、中丸精十郎・松岡壽から洋画を学ぶ。1889年日本美術協会青年絵画共進会に《美人図》が入選し、九鬼隆一が買い上げる。この年から松岡壽に指導を受け、その後山本芳翠の生巧館画塾に入塾し、本格的に洋画を始める。1891年5月明治美術会第3回展に白瀧幾之助の名を借りて《無惨》を出品、8月には通常会員となり、1895年の第7回展まで出品する。1893年教員免許状を取得し、7月三重県尋常中学校助教諭となる。1895年第4回国勸業博覧会に歴史画《御裳濯川》を三重県から出品する。1896年6月黒田清輝から白馬会への参加を促され、同会結成会員として参加し、1回展から出品する。8月21日には黒田の推薦で新設された東京美術学校西洋画科助教諭に任命され、以後亡くなるまで藤島教室から多くの弟子を輩出する。1905年には文部省から絵画研究のためフランス・イタリアに派遣され、フランスではカルロス・デュランに、イタリアではフェルナン・コルモンに学び1910年に帰国、以後の作画に新生面を開く。1911年の第5回文展に《幸ある朝》《池》などを出品する。滞欧中に文展が創設されたため後輩から審査される蟠りから二科会創設の指導者と目されたが参加せず、光風会、文展・帝展等官展一筋に活躍する。その間に《天平の面影》《蝶》《黒扇》《東洋振り》《芳蕙》《耕到天》《東海旭光》等数多くの油画作品を描いた日本を代表する画家である。1937年には横山大観・竹内栖鳳・岡田三郎助等と共に第1回文化勲章を受章する。その一方で、1901年『明星』第10号から挿画を描き、第11号から表紙画を描いている。第12号から第16号に掲載された省筆の挿画や色刷り口絵は、彫刻師木村徳太郎によって木版に附され、後の創作版画に大きな影響を与えた。また鳳（与謝野）晶子著『みだれ髪』（1901）・『小扇』（1905）、川上瀧彌・森廣著『はな』（1902）、与謝野鉄幹・晶子著『毒草』（1904）等の色刷り木版は、木村や伊上凡骨の彫刻になるが、「版」になる意図を十分に意識した原画であり、明治30年代を代表する画文一体の作品である。藤島自身も『明星』（春花、夏、秋、冬）、『はな』（花菖蒲、菊・萩・撫子）、『文藝界』（擬聖母少女）等に掲載された図版を第6回・第7回白馬会展（1901・1902）に「木版画」「石版画」として出品している。その後も『中学世界』や『光風』、絵葉書の図案、『与謝野晶子全集』第1巻（1920）等の原画を描いている。1943（昭和18）年3月19日東京で逝去、生涯現役であった。歿後間なく《琉球の舞妓》が木版画に模刻され求龍堂から刊行されている。【文献】『日本美術年鑑』（美術研究所 1944・45・46版）／『藤島武二展 Part2 知られざる模写と版画』図録（大川美術館 1989）／『日本の版画 I 1900 - 1910』展図録（千葉市美術館 1997）／『藤島武二画集』（日動出版部 1998）／木股知史『画文共鳴—『みだれ髪』から『月に吠える』へ』（岩波書店 2008）／『生誕150年記念藤島武二展』（練馬区立美術館・鹿児島市立美術館他 2017）（森）

藤城 栄（ふじしろ・さかえ）

愛知県半田町の教師仲間による版画団体「版刀会」が発行した版画誌『運』第10号（1937）に《菅平》を発表。現在『運』は5～7・10号（1931～1937）のみが確認されている。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

藤田熊男（ふじた・くまお）

1939（昭和14）年の第14回国画会に木版画《秋暮印象〔象〕》を出品。出品時は「新潟県新発田萬町甲二四七」に住む。【文献】『第十四回国画会展覽会目録』（1939）（三木）

節田謙治（ふしだ・けんじ）

1936（昭和11）年発足の名古屋エッチング協会（事務局：長船一雄方 会員8名）の同人に名を連ね、同年8月27日西田武雄を迎えての「名古屋座談会」にも参加。但し、作品は未見。【文献】『エッチング』47（1936.9）（樋口）

藤田大起（ふじた・だいき）

1935（昭和10）年、兵庫県の芦屋では版画への理解とその普及をめざして「西日本新版画制作普及協会」が創設され、その機関誌として趣味の版画研究誌『西日本新版画』が発行された。その第2年1輯（1937.3）に『裸婦』を発表。現在『西日本新版画』（1936～1938）は第1年2輯～3年2輯のうち6冊を確認している。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

藤田大三（ふじた・だいぞう）

長野県須坂の信濃創作版画研究会が発行した版画誌『樸』第1号（1933.8）に『スケッチ』を発表。【文献】『須坂版画美術館 収蔵品目録2 版画同人誌『樸』『臥竜山風景版画集』（須坂版画美術館 1999）／『創作版画誌の系譜』（加治）

藤田嗣治（ふじた・つぐはる） 1886～1968

1886（明治19）年11月27日東京府牛込区新小川町1丁目8番地に生まれる。1905年東京高等師範学校附属中学校を卒業し、東京美術学校西洋画科予備科に入学。1910年同校西洋画科本科を卒業。1913年渡仏。パリに居を定め、その後ピカソ、スーチン、モディリアーニらと交友。1919年サロン・ドートンヌに入選し、会員に推挙される。1920年代に入り、乳白色の地肌に黒の線描を駆使する独自の画風で高い評価を受け、エコール・ド・パリの代表的画家として活躍。1925年レジオン・ドヌール勲章（シュヴァリエ）を受章。1929年一時帰国。個展を開催し、第10回帝展に油彩画《自画像》を出品。翌年パリに戻る。1931年から1933年にかけて中南米を旅行し、リオ・デ・ジャネイロ、ブエノスアイレスなど各地で個展を開催。1933年帰国。翌年二科会会員（1941年退会）となり、第21回展に油彩画《巴里の黒き家》など27点を特別陳列。1938年海軍省嘱託として漢口攻略戦に従軍。1939年渡仏し、翌年帰国。1941年帝国芸術院会員となる。戦時中はその卓越した描写力が求められ、陸海軍部から度々戦争記録画の作成を委嘱された。1943年「昭和17年度朝日文化賞」を受賞。戦後は、戦争協力への責任を指弾されたが、1947年に連合軍総司令部（GHQ）が発表した戦争犯罪者リストに名前はなかった。戦犯の容疑は晴れたが、これら一連の騒動を契機に、静かな環境での制作を求め、1949年渡米。翌年パリに戻った。1955年フランス国籍を取得。同年日本芸術院会員を辞任。1957年レジオン・ドヌール勲章（オフィシエ）を受章。1959年カトリックの洗礼を受け、「レオナルド・フジタ」と改名。1966年ランスの礼拝堂「ノートルダム＝ダム・ド・ラベ（平和の聖母）」を建立し、壁画を制作した。1968（昭和43）年1月29日スイス・チューリッヒ州立病院で逝去。

版画の制作は、1910年代末頃に始まる。木版・銅版・石版・ポショワール（ステンシル）と多岐にわたり、自画・自刻の作品もあるが、その多くは職人との協働によるもので、藤田の原画をもとに職人が版を彫り、本の挿画として発表されている。現在確認できる最初のものは、1919年5月に出版された雑誌『レ・レトル・パリジェンヌ』（挿画1点 出版社不明）に挿入された自画・自刻の木版画《〔接吻〕》である。その後も『アマールと王の手紙』（ラビンドラナート・タゴール著／アンドレ・ジッド訳 自画・自刻の木版画による挿画《象》《犬》など7点 リュシアン・ヴォーゲル社 1922）、『日本昔噺』（藤田嗣治編集・訳 職人が製版したポショワールの挿画66点と表紙絵・裏表紙絵 アベイユ・ドール社 1923）、『ヴァニコロ』（リュシアン・ファブル著 自画・自刻の銅版画による著者の肖像画1点 新フランス評論社 1923）、『オリンピック競技』（ジェオ・シャルル著 自画・自刻の銅版画による著者の肖像画1点 新フランス評論社 1925）、『東方所観』（ポール・クローデル著 自画・自刻の木版画による装飾挿画114点 ジョルジュ・クレ社 1925）、『ポーゾル王の冒険』（ピエール・ルイス著 職人が製版した木口木版28点 アルテーム・ファイアール社 1925）、『平行棒』（ミシェル・ヴォケール著 自画・自刻の銅版画による挿画5点フランソワ・ベルヌアール印刷 1927）、『エロスの愉しみ』（ジャック・ブランドジョン＝オッフエンバック著 職人が製版したポショワールの挿画10点とカット アンリ・パルヴィル 1927）、『獣一党』（アンリ・ショーメ著 自画・自刻の銅版画による挿画25点 クラ・エディション社 1928）など、数多くの版画入りの挿絵本を手掛けている。展覧会への版画の出品は、1925年のサロン・デ・チュイルリーに油彩画1点と共に版画《自画像》など6点を出品したのが最初のものである。その後、同年の個展（11.20～12.5 パリ エトワール画廊）に油彩画10点などのほか版画10点、翌1926年のサロン・デ・チュイルリーにも油彩画6点と版画6点を出品。1927年にはルーブル美術館銅版画室に銅版画《自画像》（ドライポイント）の原版が収蔵された。

日本では1925年1月の『みづゑ』第239号・版画号に、太田三郎が藤田の木版画《巴里の招牌》の図版とともに版画に関する消息（「藤田嗣治君の木版画」『みづゑ』239）を伝えたのが最初のものである。同年に神戸の「版画の家」から出版された版画誌『HANGA』第6輯（1925.6）に木版画《人物》（2種）の図版、第7輯（1925.10）にも木版画《無題》の図版が掲載されているが、これらはフランスで出版された『ポーゾル王の冒険』（アルテーム・ファイアール社 1925.12）に使われている木口木版による挿絵と同図版であった。展覧会への出品は、同年（1925）の第4回仏蘭西現代美術第二次展（12.2～15 上野・日本美術協会陳列館）に油彩画3点と共に版画17点が紹介されたのが最初で、翌1926年の第5回仏蘭西現代美術展（5.15～6.25 上野・日本美術協会 主催：日仏芸術社）にも油彩画1点と共にエッチング2点が出品された。その後、一時帰国した1929年に開かれた個展（10.1～13 東京朝日新聞社）に油彩画2点などのほか銅版画《猫》《子供・三越》など20点が並び、三越での個展（10.17～21 日本橋・三越）にも油彩画2点などのほか版画も並んでいるが、これら二つの個展の出品作のうちには、マカール法（職人の名を冠したアクアチントなどの混合技法）による版画集『猫十態』（10枚組 パリ・アポロ社 1929頃）、『小児銅版画集』（10枚組 パリ・アポロ社 1930）の作品

も含まれているものと思われる。1931年には高見澤木版社より伝統木版の技法を駆使した『金髪の子』《カナリヤを持つ子供》《或る女》を刊行（井上和雄「木版画の新境地」『アトリエ』8-12）。この他、1940年のデッサン社主催「皇紀二千六百年奉祝記念現代名家素描版画展」（6.13～16 奉天・三中井、7.26～30 京城・三中井）に《狎》《猫を抱く少女》（各リトグラフ 《狎》は奉天のみ）が並び、1943年には「藤田嗣治 猫のリトグラフ展」（3.1～5 神戸・神戸画廊）が開かれている。なお、戦後の代表的な挿絵本としては、『魅せられたる河』（ルネ・エロン・ド・ヴィルフォス著 職人が製版した銅版画 26点 ベルナル・クライン社 1951）、『海龍』（ジャン・コクトー著 職人がピュランで製版した銅版画 25点 ジョルジュ・ギヨ社 1955）、『しがない職業と少ない稼ぎ』（アルベール・フルニエ／ギイ・ドルナン著 職人が製版した木口木版 21点 ピエール・ド・タルタス 1960）『四十雀』（ジャン・コクトー著 職人が製版したリトグラフ 21点 ピエール・ド・タルタス 1963）などがあるが、日本の画廊でもこれらの版画を紹介する展覧会を、「藤田嗣治新作版画展」「藤田嗣治近作版画展」などと称して度々開いている。【文献】林洋子『藤田嗣治 本のしごと』（集英社ヴィジュアル版 2011）／『レオナルド・フジタ私のバリ、私のアトリエ』（ポラ美術館 2011）展図録／『生誕130年記念 藤田嗣治展—東と西を結ぶ絵画—』（名古屋市美術館他 2016）／『没後50年 藤田嗣治 本のしごと—文字を装う絵の世界—展図録』（西宮市大谷記念美術館ほか／株式会社キューレイターズ 2018）（三木）

藤田信重（ふじた・のぶしげ）

1926（大正15）年栃木県師範学校を卒業し、姿川尋常高等小学校に勤務する。そこには版画同人誌『村の版画』（1925～1934 全19冊）を発行していた池田信吾・篠崎喜一郎らの教師がおり、藤田は初めて『村の版画』の存在を知る。1926年には編集を担当していた池田が同校から遠距離の学校へ転勤となり、『村の版画』は休刊状態になるが、1927年には池田が近くの小学校に赴任したため、1929年に復刊。藤田も復刊後の通巻8号（1929.1）から参加し、第8号に《影》《賀状》、第9号（1929）に《路》、第10号（1929.4）に《ぜんまい》、第11号（1930.7）に《洋蘭》を発表。その後、また『村の版画』は1年半ほど休刊状態になってしまうが、再び復刊（1932年1月）する。だがその年には藤田が富屋尋常小学校へ赴任したため、『村の版画』が復刊しても、再び作品を発表することはなかった。【文献】浜崎礼二「創作版画の地の塩」『版画をつづる夢 宇都宮に刻まれた創作版画運動の軌跡』展図録（宇都宮美術館 2000）／『創作版画誌の系譜』（加治）

藤野高常（ふじの・たかつね） 1899～1998

1899（明治32）年北海道滝川市に生まれる。1914年に北海道札幌師範学校本科一部に入学。1918年から小学校の教師を経て、1924年からは北海道札幌師範学校の版画教師、1943年には北海道第一師範学校教授となり、1959年に北海道学芸大学教授となるが、1962年3月には北海道教育大学岩見沢校を退官する。この間、師範学校から学芸大学、そして教育大学へと変革が進められていく中で、人生の大半を美術教育とその振興、教員養成に尽力を惜しまなかった。1998（平成10）年に逝去。版画関係では日本エッチング研究所の西田武雄がエッチング普及のため、毎年夏休みに全国の小・中学校を回り、教師や

生徒を対象とした版画講習会を行った。札幌師範学校では1938年8月1・2日にエッチング講習会（講師：西田武雄・小野忠重）を開催。参加者は教員6名で藤野も参加。その時、制作したとみられる馬槌を描いた銅版画が研究所の機関誌『エッチング』第70号（1938.8）に掲載されている。講習会の当日吹いた強い風について、藤野が「マントが吹きつけられて三角形になることから三角風と言っている」と話したことから小野は「藤野先生は中々の詩人である」と言い残している。【文献】小野忠重「北方記行」『エッチング』70（1938.8）／阿部宏行「北海道の美術教育の礎に関する一考察 藤野高常の教育的視座について」『北海道教育大学紀要（教育科学編）』63-1（2012.8）（加治）

藤野常夫（ふじの・つねお）

三木露風の詩集『白き手の猟人』（東雲書店 1913）に藤野彫版による植物をモチーフとした木版挿画を制作。無名のまま夭折したとされるが詳細は不明。【文献】木股知史編『近代日本の象徴主義』（おうふう 2004）（樋口）

藤牧義夫（ふじまき・よしお） 1911～1935？

1911（明治44）年1月29日群馬県邑楽郡館林町大字館林1006番地（町名・裏宿、現・館林市城町684番地）に生まれる。1925年館林尋常高等小学校高等科を卒業。翌1926年父・巳之七（1857～1924 号・三岳）を追慕し、その足跡・思い出などをまとめた自筆本『三岳全集』、『三岳画集』（完成は1927.1.1）を制作。1927年図案家を目指し、上京。住み込みで、染色図案家佐々木倉太に学ぶ。1929年頃より独学で木版画を始める。最初期の作例としては《[サイレン]》（東京都現代美術館蔵）がある。1930年秋頃か、佐々木門を出て、神田の商業図案社「玄黄社」に勤め（1933年夏までか、その後10月頃から銀座スタジオに勤務）、「浅草区神吉町十一 東屋商店方」に住む。1931年から本格的に展覧会に出品するようになり、4月の第9回春陽会展に《ガード下のスパーク》、5月の第18回日本水彩画会展に《夜更けの給油所》、6月の第1回新興版画会展（21～25 新宿・三越、8.5～6 大分・丸吉呉服店）に《街の夜の路》《宵の給油所》《上野見晴しの夕映》《弘前（ママ）風景》、9月の第1回日本版画協会展に《請地の夜》《夜景（中之橋）》、と次々に入選。また、版画誌『きつつき』第3号（1931.6 創作版画倶楽部）に「第一回応募佳作発表」（藤森静雄選）として『朝霧』（1930.11.9制作）の縮小図版が掲載された。翌1932年4月には、「創作版画の大衆化」を掲げる「新版画集団」の結成に参加し、同集団の中心的作家として機関誌『新版画』や主催展に精力的に作品を発表。『新版画』へは、第1号（1932.6）に《朝》を発表したほか、第2・8号を除き、第17号（1935.7）まで毎回作品を発表したが、第17号は「藤牧義夫特輯号」（木版による表紙と《裏街》など4点を発表）であった。また展覧会へは、1932年の第1回展（10.15～20 銀座・川島屋）に《墓（朝）》《墓（夕）》《青葉》《都会風景》《冬》《朝》の6点を発表。その後も、第2回展（1933.3.1～6 神田・三省堂）に《ごみ》《あさ No.2》など7点、第3回展（1933.11.23～26 神田・東京堂画廊）に《都会風景》6点、第4回展（1934.6.1～6 上野・松坂屋）に《赤陽》（東京国立近代美術館蔵）など13点を出品したほか、地方への巡回展（第2回展の巡回展 1933.4 満州・奉天）や同集団が企画した「浮世絵・創作版画展覧会」（1932.10 向島・小梅小学校）、「第1回版画アンデパンダン展」（1934.6 神田・東京堂画廊）・「江

戸東京風景版画展」(1934.7 日本橋・白木屋)・「エノケン一座を回(ママ)る版画展」(1934.9 浅草・松竹座)などに出品。またその間、公募展などにも積極的に出品し、1932年の第7回国画会に《あをば》、第2回日本版画協会に《はか》《てら》、巴里・東京新興美術展(12.6～20 東京府美術館)に《ごみ》、1933年の第3回日本版画協会に《空地》《鐵》、第14回帝展に《給油所》、1934年の第9回国画会に《観衆》《井ノ頭》が入選したほか、1933年の第5回童土社展(8.19～22 静岡・松坂屋)にも《都会風景A》《都会風景B》を招待出品。1934年には全長では約60メートルに及ぶ白描の絵巻《隅田川両岸画巻》全4巻(大谷芳久氏は各巻に仮題を付し、「試作 橋の巻」「申孝園の巻」「白鬚の巻」「三囲の巻」とする。9月中旬着手、11月末完成か)を制作した。翌1935年2月頃からか、旭正秀の主宰する雑誌『デッサン』の編集などを手伝うようになり、6月には西田武雄による新版画集団会員への銅版画講習会(16 日本エッチング研究所)に参加し、作品を制作。また同月、「藤牧義夫版画個人展覧会」(25～27 神田・東京堂画廊 主催：新版画集団)を開催した。同年(1935・昭和10)9月2日、新版画集団仲間の小野忠重を訪ねた後、行方不明。その直後に開かれた「現代版画展覧会」(9.22～30 浅草・松屋 主催：新版画集団)に《浅草(映画街)》《浅草(観音)》《永代橋》《蓮池風景(上野)》(エッチング)《上野東照宮境内》《雪》の6点、第4回日本版画協会展(大阪展：10.16～19 大阪・朝日会館、東京展：11.13～24 東京府美術館)にも《既橋の夜》が出品されているが、作品搬入は集団員によってなされたという。今日、《赤陽》(1934 東京国立近代美術館蔵)を始めとする一連の作品群は、1930年代前半の「モダン都市・東京」を独自の視点で捉えたものとして高い評価を受けているが、展覧会出品作にはその所在が不明なものも多く、また藤牧の作とされる現存作品の内には、他者により改版されたものがあるなど、藤牧の創作活動の全貌を知るにはさらなる調査が必要なようである。【文献】大谷芳久『藤牧義夫 眞偽』(学藝書院 2010)／『生誕100年 藤牧義夫』(求龍社 2011)／『大正期美術展覧会出品目録』(東京文化財研究所 2002)／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006)(三木)

藤村知子多(ふじむら・ちねた)

紫泉と号す。1893(明治26)年頃中丸精十郎の画塾に入り、洋画を学ぶ。先輩に大下藤次郎がおり、大下の事情により大下の本郷追分町の住居を引き受ける。1895年第7回明治美術会に浅井忠門人として墨画《風景》を出品、以後8回・創立10年展に油画を出品する。1898年浅井が東京美術学校教授に就任すると共に浅井教室に庄野宗之助や倉田白羊等と共に入学している。1900年パリ万国博覧会に《海辺》を出品し渡仏する。翌年1月の和田英作宛書簡中の「今から四十年後の肖像」やパリで発行された『パンテオン会誌』(第2号)に中村不折が描いた《小像図案》には、現地滞在の岡田三郎助・久保田米斎・和田・中村・河合新蔵・鹿子木孟郎等と共に藤村の似顔が描かれている。1904年フランスより帰国。1905年9月『平坦』1号に「滯仏日記」及び挿図《写生》(写真版)、2・5号に「ブロン日記」及び挿図《馬車》(写真版)を発表している。【文献】「畏友大下氏」『みづゑ』82(1911.12)／森登編『平坦』目録』『近代日本版画の諸相』(中央公論美術出版 1998)／『パリ1900年・日本人留学生の交遊』『パンテオン会雑誌』

資料と研究』(ブリュッケ 2004)(森)

藤本賢三(ふじもと・けんぞう) 1906～1976

青森での最初の版画同人誌『緑樹夢』に刺激された若い洋画家たちは、「青森創作版画研究所・夢人社」を組織し、版画誌『彫刻刀』(1931～1932 全17冊)を創刊する。その第2号(1931)に《落陽》、第3号(1931)に《沈黙》、第4号(1931)に《裸婦》、第5号(1931)に《紫陽花》、第6号(1932)に《賀状》《子守》、第7号(1932)に《風景》、第12号(1932.7)に《松木屋遠望》を発表。当時、青森県西津軽郡木造町に在住。【文献】『緑の樹の下の夢—青森県創作版画家たちの青春展』展図録(青森県立郷土館 2001)／『創作版画誌の系譜』(加治)

藤本志一(ふじもと・しいち)

長野県師範学校一部1年に在学中、同校生徒発行による版画誌『樹水』第3号[1941]に《田舎》を発表。長野県師範学校は1949年の新制信州大学発足に伴い教育学部の一部となった。信州大学教育学部発行『卒業生名簿昭和25年』(1950)では藤本志一の卒業は確認出来ず、同期生が卒業している1945年9月の卒業生名簿には「藤本吉一」が掲載されていて、どちらかの誤植とも考えられる。【文献】『樹水』2(加治)

藤本東一良(ふじもと・とういちりょう) 1913～1998

1913(大正2)年6月27日静岡県伊豆下田に生まれる。生後すぐ大阪に移り住む。1930年大阪府立天王寺中学校在学中に京都のアカデミー鹿子木下鴨塾に入り石膏デッサンを学ぶ。また、赤松洋画研究所に入って赤松麟作の指導を受けた。1931年中学校を卒業して上京、川端画学校に入学。1933年寺内萬治郎の門下生となる一方、同舟舎絵画研究所で小林萬吾の指導を受けた。1934年版画誌『白と黒』47号(5月)に《慈姑》、49号(7月)に《大蒜》の木版画を掲載。以後、料治熊太編輯の『版藝術』『郷土玩具集』『土俗玩具集』再刊『白と黒』『おもちゃ絵集』『版画蔵票』に木版画を寄せた。1935年東京美術学校油画科に入学し、本科では藤島武二教室に学ぶ。1937年7月、美校彫刻科の國光與とともに、ゴーギャンの画風や『ノア・パオ』に触発されて「南洋群島」を旅行、サイパン、ヤップ、パラオを巡ってスケッチ板を用いて油彩画を制作し、コロル(パラオ)ではア・バイの浮彫装飾の拓本を採取した。9月に帰国、10月に美校陳列室で「パラオ島建築装飾拓本展」を開催した。また帰国後に「南洋群島」に取材したエッチングを制作し、翌1938年の日本版画協会第7回展に《カナカ老婆》《チャモロの子供》《カナカ娘》《サイパン教会》(以上、エッチング)と《パラオの女》(木版画)を出品した。『エッチング』74号(1938.12)には、これら出品作品への恩地孝四郎による批評が掲載されている。1939年光風会第26回展に《水夫M君像》《機関車の人》で初入選し、F氏賞を受賞。また同年第3回海洋美術展に《天測》を出品し海軍協会賞を受賞した。1940年東京美術学校を卒業、その年第4回海洋美術展に《ウラカス島を望む》を出品して朝日新聞社賞を受賞。1941年光風会第28回展に出品し、会友となる。また同年第4回新文展に《父とゴムの木》で初入選。1942年光風会第29回展で光風特賞を受賞。1944年南方従軍を命じられて台湾方面へ赴き、1945年海軍報道部に出向してポスター等の原画を描く。戦後は、1946年秋の第2回日展に出品し、特選を受賞。1947年光風会第33回展に出品し、光風特賞

を受賞。また日展に無鑑査出品して特選を受賞する。その後も日展と光風会展に出品を続ける。1953年から1955年にかけてフランスに留学しアカデミー・グラン・シヨームエールで学ぶ。帰国後、1966年に日展評議員、1972年に光風会理事に就任した。1993年日本芸術院会員となる。1998(平成10)年9月17日東京で逝去。【文献】『藤本東一良画集』(日動出版部 1995) / 『日本美術年鑑』1999年版(東京文化財研究所 2000) / 『美術家たちの南洋群島展図録』(町田市立国際版画美術館ほか編 2008)(滝沢)

藤本義男(ふじもと・よしお)

藤本の版画作品が最初に確認できるのは、長野県須坂で小林朝治が平塚運一を講師に招いて版画講習会を開催したのを契機に発行した版画同人誌『櫟』(1933~1937全13冊)である。その第10輯(1936.7)に《虎杖》、第11輯(1936.11)に《住吉人形》と実用版画として《荷札》を、第12輯(1937)に《賀状》、第13輯(1937.6)に《愛玩票》を発表している。当時、藤本は和歌山県西牟婁郡長野村に住み、西牟婁郡富里村の和田小学校で教職に就いていた。第12輯(1937)の後記には藤本が学童の年賀状を版画作品集にして発行したことが記されている。その後も和歌山から九州や青森などの版画誌に作品を発表しており、大分県で武藤完一が発行していた『九州版画』(1933~1941全24冊)の第13号(1937.1)に《年賀状》、第14号(1937.4)に《山》、第15号(1937.7)に《南紀芳養浦》、第16号(1937.10)に《郷玩イロハカード「ナ」》、第17号(1938.5)に《日置川の清流》、第18号(1938.11)に《富山の獅子頭》、第20号(1939.11)に《郷土風景》を発表。蔵書票にも興味を持ち、青森の佐藤米次郎が発行した『趣味の蔵書票集』第3回(1938)に木版の《無題》《龍之図》の2点を初めとして、最終号の第5回(1940)まで発表。並行して東京の料治熊太が主宰した『版画蔵票』第2・3、5~8号(1937~1938)にも発表している。その後は武井武雄主宰の年賀状交換会である『櫟の会』の第6~9回(1940~1943)に参加。なお、『櫟』10輯では「義勇」となっているが、「義男」の誤植と判断。【文献】『趣味の蔵書票集』3・4・5 / 『須坂版42画美術館 収蔵品目録2 版画同人誌「櫟」「臥竜山風景版画集』(須坂版画美術館1999) / 『創作版画誌の系譜』(加治)

藤本義雄(ふじもと・よしお)

長野県須坂の小林朝治は、平塚運一を講師に招いて開催した「版画及び図画講習会」(須坂小学校 1933?)を契機に「信濃創作版画研究会」を立ち上げ、版画誌『櫟』(1933~1937全13冊)を発行。藤本はその第10輯(1936.7)に《葱坊主》を発表する。【文献】『須坂版42画美術館 収蔵品目録2 版画同人誌「櫟」「臥竜山風景版画集』(須坂版画美術館 1999) / 『創作版画誌の系譜』(加治)

藤森静雄(ふじもり・しずお) 1891~1943

1891(明治24)年8月1日福岡県久留米市に生まれる。1905年福岡県立中学明善校に入学。藤森の兄政夫が青木繁の第一義と同窓だったので縁で、二年生頃に夏休みに帰郷していた青木を友人と共に訪ねる。憧れの美校生に会って絵について語った喜びは大きく、自身も美校生を志すようになる。1907年、文展で落選し久留米に帰郷した青木を度々訪ねる。青木は藤森のような郷土で絵を志す

者のためにデッサンの研究所を設けようと大きな家を借りて改造し、規約を印刷するところまで準備を進めたが、周囲の理解が得られず実現しなかったという。1910年中学校を卒業。上京し、白馬会原町研究所に入って美校の受験準備をする。田中恭吉や大槻憲二らと共に「ヌーボー式」という新入生紹介式に出席。恩地孝四郎や永瀬義郎も同じ研究所にいた。5月には白馬会第13回絵画展に水彩画2点が入選。1911年東京美術学校予備科西洋画科志望に入学。10月、藤森の発案で、田中・大槻と共に回覧雑誌『ホクト』を創刊。翌月に発行した2号には竹久夢二との交流でも知られる久本DON(久本信男)や田中二郎も加わった。同誌は2号までしか確認されていないが、1913年5月からは新たな回覧雑誌『密室』を創刊。田中恭吉と交替で1~3・5・8号の編集を担当(4号は不明)、9号までが確認されている。この間、1912年には田中の紹介で、当時田中と同じアパート上野倶楽部に住んでいた夢二と知り合っている。1913年北豊島郡巢鴨村池袋893に家を借り、弟の美津彦と住む。隣家には田中と大槻が住んだ。1914年3月、田中から恩地と共に自刻の木版画集を洛陽堂から出版する計画に誘われる。田中と共に車坂の小幡屋に行き、版画刀を求め、版画を始める。4月には三人で恩地宅に集まり、私輯『月映』Iをまとめる。第VI輯まで制作ののち、9月に『月映』Iを洛陽堂から公開。創刊と前後して『新真婦人』第18号(1914.10)に自刻木版画を発表。10月に夢二の港屋絵草子店が開くと、そこで開催された第1回港屋展覧会にペン画を発表、また月映同人として木版画や素描も発表した。12月に妹芳子が17歳で逝去し、『月映』第IV輯(1915.1)は「死によりて挙げらるる生」と題して藤森の妹への追悼号として刊行された。最終号として第VII輯 告別(1915.11)が出る直前に田中が逝去、友人たちと日比谷美術館において田中恭吉遺作展覧会(1915.12.3~5)を開いた。1916年東京美術学校西洋画科を卒業後、父善平が町長を勤めていた福岡県嘉穂郡飯塚町に戻る。1918年、伯母を訪ね、台湾に滞在。台湾での写真やスケッチが遺されている。1919年福岡県立嘉穂中学校の教諭となる。同年開催された第1回日本創作版画協会展に『月映』の頃の作品が出品されるが、これは東京にいる恩地が差配したものだった。1921年雑誌『内在』に参加。恩地・大槻・久本・田中二郎ら学生時代の回覧雑誌『密室』の仲間が再結集した感がある。1922年母トリが逝去。同年、再び上京し、しばらく離れていた版画制作を再開。『詩と版画』第3輯(1923.7)をはじめとして、5~13輯(1924~1925)に参加。1924年北豊島群板橋町大字中丸605にアトリエが完成し転居。『詩と版画』同人たちの親睦と編集会議、後進の指導を兼ねた会合が藤森宅で開かれるようになる。第8輯(1924.11)からは編集を担当。月映期の生と死をテーマにした作品から、三角刀の彫りを活かした単色の静物画、ホワイトや薄紫など色遣いに独自性が見られる多色刷の風景画や人物像など平明な題材に移行していく。第5~9回日本創作版画協会展(1923~1929)、第1~7回日本版画協会展(1931~1938)、第3~15回春陽会展(1925~1937)、第15回帝国美術院展(1934)に出品のほか、卓上社展、三紅会展、デッサン社展などにも出品。版画誌『HANGA』『村の版画』『風』『白と黒』『きつつき』『線』『版芸術』『飛白』等に参加。また1923年夢二・恩地・久本らと「どんたく図案社」の創設に参加するも、震災のため実現せず。同年12月の日付が記された新潮社のための封筒図案や、新潮社月報表紙図案が遺されており、

装丁の仕事も精力的に行っていたと考えられる。1931～1934年にかけて版画集『大東京十二景』となる連作を発表。無理を重ねて体調を崩し、医師から失明の危険を告げられ、童話創作への転向を試みた時期がある。1935年11月から福岡日日新聞夕刊に近松秋江の「紅雀荘」、翌年10月からは貴司山治の「楽園追放」に木版画による新聞小説挿絵を連載した。1936年から日本版画協会理事を務め、1937年からは協会事務所を引き受けていたが、1939年に父善平が亡くなったために、同年6月にアトリエを引き払って家族とともに福岡県飯塚市へ帰郷。自宅に日本版画協会の九州支部を設置したが、主だった活動はなかった。1940年飯塚商業専修学校の教諭となる。同年の第9回日本版画協会展では版画興隆期作品として『月映』の作品5点が展示される。1943（昭和18）年5月28日飯塚市徳前で逝去。翌1944年の第13回日本版画協会展において「藤森静雄遺作抄」として大正初期の《静物》、『新東京百景』所収作品、『大東京十二景』所収作品が特別陳列された。【文献】藤森静雄「版画を始めた頃の思出」『詩と版画』11（1925.5）／藤森静雄「往事追想」『エッチング』91（1940.6）『藤森静雄版画展』図録（福岡市美術館1982）／『月映』展図録（宇都宮美術館ほか 2014）／『創作版画誌の系譜』（井上）

藤森友義（ふじもり・ともよし）

日本エッチング研究所の西田武雄はエッチング普及のため、毎年夏休みなどに全国の小・中学校を回り、教師や生徒を対象に版画講習会を行っていた。長野県松本市松本商業学校においては、同校教師寺尾浩が1937年10月30・31日に講師として西田を招き、エッチング講習会を開催した。参加者は近隣の小学校教師12名と生徒たち9名であった。諏訪郡高島小学校の教師であった藤森も参加。その時の作品が研究所機関誌『エッチング』第61号（1937.11）に掲載されている。藤森は絵を得意としていたようで、水彩画による『こどものくらし お手伝い編』（藤森友義後援会）を上梓。その後、『小泉八雲読本』（蓼科書房 1948）や『どんぐり』（信濃教育会出版部 1948）の挿絵の仕事にも携わっている。【文献】『エッチング』61（加治）

藤原信一（ふじわら・しんいち）

月岡芳年門人である山崎年信が、大阪で活動していた時代に弟子入りした。後に上京して黒岩涙香の『萬朝報』の挿絵を担当。その関係で涙香の著書の口絵も描いた。1893（明治26）年の扶桑堂発行の黒岩涙香著『鉄仮面』や1894年の『白髭記』後編などの木版多色摺の口絵を担当した。その他の雑誌や単行本の挿絵でも活動している。【文献】山田奈々子著『木版口絵総覧』（文生書院 2005）（岩切）

富士原 房（ふじわら・ふさ）

1940年、東京で富士原は赤坂次郎・栞岡良・齊藤無沙史の3人と共に版画誌『きつゝき』（木津津木会 全2冊）を発行する。その第1号（1940.3）に『宵桜』『花と裸婦』『独楽（蔵書票）』、第2号（1940.7）夏の巻に『【抽象】』『決心話』『花と裸婦』を発表。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

布施信太郎（ふせ・しんたろう） 1899～1965

1899（明治32）年4月30日山形県鶴岡市に生まれる。布施家は代々伊達藩士で、父の淡（あわし）は洋画家で

あった。弟の悌次郎も画家。仙台に転居。東北学院中等部を中退し1914年に上京、斎藤与里に師事する。1915年太平洋画会研究所に入り、中村不折に師事する。なお、東北学院中等部を卒業し1918年に上京したとの説もある。1924年の第5回帝展に《恵まれし日》が初入選。1926年の第7回展から1929年の第10回展、1934年の第15回展に洋画を出品。また1938年の第2回新文展、1940年の紀元2600年奉祝美術展、1942年の第5回新文展、1943年の第6回新文展、1944年の文部省戦時特別美術展にも洋画を出品した。さらに戦時下開催の第2回聖戦美術展（1941）、第1回大東亜戦争美術展（1942）、陸軍美術展（1943）にも出品した。官展や戦争画展へ出品する一方で、1927年第23回展より太平洋画会会員となり、以降継続して出品する。1935年サイパン、ヤップ、パラオなどマリアナ、カロリン諸島西部に約9ヶ月滞在して制作、そのときの取材にもとづく油彩画を1936年の太平洋画会第32回展、1937年の同第33回展、先述の奉祝美術展、第5回新文展、戦時特別美術展に出品した。また、1936年に太平洋画会の会員で「日本新版画協会」を組織し、『日本新版画協会後集』に《南洋の絵 ヤップ島》（木版画）を制作した。1940年「南洋美術協会」の結成に参画し、1941年の第1回展から1943年の第3回展まで出品する。戦中まで太平洋美術学校教授を務める。1957年太平洋美術学校の理事に推され、また同年から1963年まで太平洋画会の代表を務めた。1965（昭和40）年4月22日東京で逝去。【文献】『美術家たちの南洋群島展図録』（町田市立国際版画美術館ほか編 2008）（滝沢）

伏田正保（ふせだ・せいら）

1929（昭和4）年の第1回京都創作版画会展（2.1～5 京都・大丸）に木版画《ハワイの温泉場》を出品。【文献】『創作版画・古版画展覧会目録〔京都創作版画会第一回展覧会〕』（京都創作版画会 1929）（三木）

二神純孝（ふたかみ・すみたか）

➡下村為山（しもむら・いざん）

二町欽次郎（ふたまち・きんじろう）

洋画家と思われる。光風会第17回展（1930）に《伊豆の山》《午後光》を出品。1935年6月16日、小野忠重の斡旋で日本エッチング研究所（西田武雄主宰）において開催された新版画集団のエッチング講習会に、小野忠重・水船六洲・藤牧義雄・清水正博らとともに参加する。【文献】『エッチング』33／『大正期美術展覧会出品目録』（東京文化財研究所 2002）（樋口）

二見 確（ふたみ・かく）

1932年当時、日本エッチング研究所を主宰する西田武雄は、東京市内の小学校教員を招き、実習を主としたエッチング座談会を開催。その第2回が1933年4月11日に開かれ、東京麹町区麹町小学校の教師をしていた二見も参加。エッチングの描き方、腐食法、プレスの仕方など直接西田から説明を受ける。その時に制作したと思われる銅版画作品と座談会の詳細が研究所機関誌『エッチング』第6号（1933.4）に掲載されている。その後、二見は研究所製プレス機を購入し、エッチングを制作。第10・13号（1933.8～11）にいずれも木を描いた銅版画が掲載されていて、技術の上達も見て取れる。プレス機所有者欄には第9号（1933.7）から掲載されている。【文献】『エッ

チング』6・9・10・13（加治）

舟岡忠幸（ふなおか・ただゆき）

料治熊太は1930年に創作版画を中心として、詩・短歌・俳句の同人誌『白と黒 [第一次]』（1930～1934 全50冊）を創刊し、その後、再刊 [第二次]、第三次と併せて全59号に及ぶ版画同人誌としては異例の長期刊行を行った。創刊当初の編集同人は料治を中心に舟岡忠幸を含めた5人であったが、実際は料治が一人で刊行の一切を取り仕切った。舟岡は『白と黒 [第一次]』創刊号（1930.2）に木版画《水差》《水滴》と詩2篇、第2号（1930.3）に《風景》を発表。同年、静岡の版画誌『ゆうかり』を発行している童土社の同人が開催した「第2回童土社絵画展覧会」（1930.10.11～13 田中屋襦衣店）の版画部門に『白と黒』と同じ作品《水差》《水滴》《風景》の3点を出品している。その後は広島県呉（郷里？）の郵便局長となり、版画制作から遠ざかる。【文献】料治熊太「終刊にのぞみて」『白と黒 [第一次]』50（1934.8）／『創作版画誌の系譜』（加治）

船川未乾（ふなかわ・みかん） 1886～1930

1886（明治19）年4月26日船川仲（なかつかさ）・初榮の三男として京都市内に生まれる。本名は貞之輔（ていのすけ）。少年期・青年期の経歴は不詳。洋画家を志して廣瀬勝平に就き、1907年前後に東京へ出て中川八郎に師事。京都にもどったのは、1913年前後であったと推測される。はじめ田中村に住み、やがて南禅寺北ノ坊町へ移る。1915年5月、寺町の佐々木文具店で個展開催。そのころ、鯖寿司の老舗「いづう」の娘・佐々木咲子と結婚。1917年11月、京都帝国大学学生集会所で「船川未乾油画展覧会」を開催。深田康算・朝永三十郎の京大両教授が支援者となる。1918年、大丸呉服店でおこなわれた「エラン・ヅキタール小劇場」の公演のために背景画を描く。1919年2月、竹内勝太郎と親交を結ぶようになる。同年8月、園頼三と詩画集『自己陶醉』（装幀／挿絵が船川未乾、色刷木版画1葉を含む）を刊行。1920年3月、園頼三と詩画集『蒼空』（装幀／挿絵が船川未乾、色刷木版画1葉を含む）を刊行。1921年川田順歌集『陽炎』、松原寛『現代人の芸術』、藤井乙男『江戸文学研究』、高倉暉『心の劇場』などを装幀。1922年3月京都商業会議所で個展開催。4月4日、咲子と共に神戸で熱田丸に乗船、フランスへ向かう。5月18日パリに到着。グランドシヨミエール・研究所に通うかたわらエッチングの研究を開始。12月から翌1923年4月にかけて南仏に滞在する。パリではアンドレ・ロート研究所に通い始める。1924年2月22日、マルセイユで香取丸に乗船、3月29日帰国。京都の鹿ヶ谷桜谷町に住む。1925年夏「鹿ヶ谷法然院町59」にアトリエを建てる。1927年『中央美術』（1月号）に未乾の文章「エッチングの芸術的価値」が掲載される。尾関岩二の童話集『お話のなる樹』（装幀／挿絵：船川未乾）刊行。9月、東京日本橋丸善で個展開催。10月、園頼三『怪奇美の誕生』（装幀・船川未乾）刊行。1928年1月、竹内勝太郎の詩集『室内』（装幀・船川未乾）刊行。7月7日、京都大学楽友会館で開催された「伊曾保物語展」にイソップ物語挿絵デッサンを出品。夏、乾性肋膜炎にかかる。第一書房の詩誌『パステオン』VI号（9月）・VII号（11月）・IX号（12月）に船川未乾の作品が写真掲載される。『新美術講座 洋画科』（中央美術社 10月）から未乾の「エッチング作法」の連載が始まる。1929年8月、病状悪化。1930（昭和5）年4月9日京都市で逝去。法号は「龍光院未乾貞昭居士」。未

乾のエッチング作品は、図版としては6点知られているが、現存は確認されていない。【文献】園頼三「船川未乾君の芸術」『中央美術』13-11（1927.11）／竹内勝太郎「船川未乾論素描」『美之國』4-1・2（1928.2）／園頼三「逝ける船川未乾君」『美之國』6-5（1930.5）／富士正晴『榊原紫峰』（朝日新聞社 1985）／後藤洋明「浮上する画家たち」『北御牧アートだより』1～13（1988.10～2002.2）／福田知子『詩的創造の水脈』（2008）／丹尾安典「船川未乾素描（1）」『一寸』56（学藝書院 2013.11）、「未乾素描（2）」～（11）『一寸』57～66（学藝書院 2014.2～2016.5）（丹尾）

船崎光治郎（ふなぎき・こうじろう） 1900～1987

1900（明治33）年6月11日兵庫県尼崎市に生まれる。旧制伊丹中学中退。はじめ日本画を志し、京都で川合玉堂に学んだという。1918年に上京。昭和のはじめまでに創作版画家との交流が始まったとされるが、『詩と版画』第3輯（1923.7）で告知された「船崎光次（ママ）郎作品頒布会」の内容は絵画と彫刻である。1926年に樺太へスケッチ旅行に赴き同地が気に入り、翌年（1929年とする資料もある）『樺太日々新聞』に入社して移住。樺太の風景や高山植物に魅せられ、同時に木版画に道を定める。1931年第1回日本版画協会展に《葡萄》《桃》《風景》で初入選、第2回展から会員となり、第4回展まで出品を続ける。また、1931年の第9回春陽会展にも《芍薬》《椿》を入選させている。『樺日』記者時代は短かったと推察されるが、樺太にはその後もしばしば渡り、植物に取材した制作も続けて牧野富太郎や武田久吉の図鑑編纂に協力したという。牧野による解説が付されたシリーズ『華容図聚』はこの頃（1930年代前半）の作か。1934年ホクト社第5回展に《女待宵草》を出品し、翌年「新興美術家協会」の結成に参加。1940年日本版画協会が企画した『新日本百景』に《海馬嶋烏帽子岩》で参加、またおそらく同年『樺太名勝八景』を刊行。1942年に千葉県夷隅郡御宿町に移住、木版画集『房総風物聚』に着手（同年のうちに第一～三輯を完成、第四輯は戦後の1965年に完成か。第五～七輯も予告されたが未確認）。戦後まもない1947年には武田久吉の『高山花譜』に自刻自摺の木版挿図を数多く寄せ、代表作としている。1957年『御宿：船崎光治郎自刻版画誌 No.1』を日本観光美術協会より創刊（樺太特産の植物集として第二輯が、外房をテーマとして第三輯が予告されるが未確認）。1964年に千葉県茂原市に移り、木版画の講習会を開催するなかで研究会への気運が高まり、翌年千葉市において「版画を作る会」を発足させる。同会には安西七郎や金子周次も参加した。1966年館山市で船崎光治郎木版画作品展覧会（いとう屋）を開催。1974年には代表作『高山花譜』の挿図のみを再摺して（一部は改刻・新作も追加）木版画集とし、改訂自家版第一輯として再刊している（第二輯、三集も予告されるが未確認）。1987（昭和62）年2月6日千葉県茂原市で逝去。【文献】船崎光治郎「私と樺太及山草」『樺太』8-8（1936.8）／船崎光治郎「失った故郷」『樺太』10-1（1938.1）／武田久吉＋船崎光治郎『高山花譜』（富岳本社 1947）／『御宿：船崎光治郎自刻版画誌 No.1』（日本観光美術協会 1957.11）／「登場 大衆に根ざした版画を追求する 船崎光治郎さん」『朝日新聞』（1976.2.23）／『昭和期美術展覧会 出品目録 戦前編』（東京文化財研究所 2006）（西山）

船橋柿園（ふなばし・しえん）

昭和初期頃に、《本郷吉祥寺》《二重橋》《靖国神社》な

ど東京風景を描いた木版画集『創作版画集 第一集～第六集』（各集2図袋入 12図）の制作が知られるが、詳細は不明。【文献】『山田書店新収目録』40（2000.4）（樋口）

船本茂一（ふなもと・しげかず）

東京の料治熊太は多くの版画誌を発行したが、そのうちの版画同人誌『白と黒（第一次）』（1930～1934 全50冊）の第12号（1931.3）に《文楽人形》、第13号（1931.4）に《文楽人形》、第14号（1931.5）に《塩焼く竈》、第15号（1931.6）に《デコ》、第16号（1931.7）に《正月デコ》、第17号（1931.9）に《デコ》、第18号（1931.10）に《秋立つ海》、第20号（1932.1）に《舅の頭》と俳句「どんど」、第21号（1932.2）に《影絵人形》を発表。同じ料治が並行して発行した版画同人誌『版芸術』（1932～1936 全58冊）の第9号（1932.12）に賀状、第15号（1933.6）に《人形芝居（鳴門風俗）》、第18号（1933.9）に《阿波人形》を発表した。これらの多くは文楽人形を題材とした木版画である。なお、『白と黒（第三次）』第1年2号（1937.4）には俳句作品のみが掲載されている【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

普門 暁（ふもん・ぎょう） 1896～1972

1896（明治29）年8月15日奈良県奈良市に生まれる。まもなく東京に移り住む。東京高等工業学校（所在地から長く「蔵前」と称されたため「蔵前工」と称する文献あり。現・東京工業大学）で建築意匠を学ぶ。また安田祿郎に師事し、新傾向美術の表現技術を学んだとされる。東京高等工業学校を中退、川端画学校に入って日本画を学び、「暁水」と号す。油彩画の制作も始め、1918年に太平洋画会第15回展に《市街雑音》《静けき夜の律動》《観喜と恐怖と》《モデル》《石井猯氏の舞踊》の未来派的素描と水彩画全5点を出品した。また同年の二科第5回展に水彩画《フューモレスク（石井猯氏の舞踊）》を出品。この間、巽画会絵画研究会でも活動する。1920年二科第7回展に彫刻作品を出品するが落選、その反動として巽画会で活動する日本画家の伊藤順三・萩原徳太郎らと未来派美術協会を結成して第1回展を開催した（出品作品は絵画8点、彫刻2点）。同時期に来日したブルリユークやパリモフと交流。この年大阪に住み始め、1921年赤松麟作・斎藤奥里・上田天昭（経営者）らと、大阪市南区笠屋町求我堂内に大阪芸術院（求我洋画研究所）を設立して指導にあたる。この年、石井柏亭に勧められて二科第8回展に油彩画を出品。また未来派美術協会第2回展の大阪展に10数点出品した。1922年大阪の柳屋から木版画「未来派宝船」を売り出す。この年運営をめぐる内紛により未来派美術協会から除名される。1923年大阪に演劇映画研究所が開設され、澤田正二郎と講師になり舞台美術を指導した。1924年東京に戻りデザインの分野を開拓して活動を開始する。戦後は、東京・横須賀・奈良などに住み、染織図案・絵の具・塗料の開発とそれらを利用した製品開発などを試みた。1972（昭和47）年9月28日大阪で逝去。【文献】『特別陳列 普門暁展図録』（奈良県立美術館1978）（滝沢）

扶 陽（ふよう）➡ 檜崎栄昭（ならざき・えいしょう）

降旗恭充（ふりはた・やすみつ）

長野県安曇郡の小学校教師たちは、教育者・版画家として活躍していた郷里の先輩武田新太郎を顧問に迎えて

「黄樹社」を組織し、版画同人誌『黄樹』（1937～1938 全2冊）を発行した。その創刊号（1937.3）に《ヴィナス》、第2号（1938.5）に《躍子》を発表。当時、北安曇郡池田小学校に勤務。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

古内行雄（ふるうち・ゆきお）

1930（昭和5）年に青森中学を卒業。同年、青森での最初の版画同人誌『緑樹夢』が青森中学校の同級生であった柿崎卓治・佐藤米次郎・根市良三の3人によって発行される。『緑樹夢』に刺激された若い洋画家たちは「青森創作版画研究所・夢人社」を組織し、『緑樹夢』を吸収するかたちで版画同人誌『彫刻刀』（1931～1932 全17冊）を創刊。古内も参加し、その第1号（1931.6）に《カフェーの女》、第2号（1931）に《顔二題》、第3号（1931）に《怪談》、第4号（1931）に《涼風（模刻）》、第5号（1931）に《秋の山路》、第6号（1931）に《年賀状》3点と《蔵書票》、第7号（1932）に《新城小景》を発表するが、その後の消息は不明。【文献】『緑の樹の下の夢—青森県創作版画家たちの青春展』（青森県立郷土館 2001.10）／『創作版画誌の系譜』（加治）

古川 定（ふるかわ・さだむ）

大分ではじめての版画講習会が1931年8月3～7日、大分県師範学校において、創作版画倶楽部主催のもと講師平塚運一により開催された。講習会を記念して武藤完一は版画誌『彫りと摺り』（1931～1933 全8冊）を創刊（編集後記『彫りと摺り』創刊号）。県内の教職に就いていた古川も参加し、制作した木版画《トルソ》が第1号（1931.9）に掲載されている。【文献】「創作版画講習会其他版画展等」『郷土図画』（15 1931.10）／池田隆代「大分県における創作版画誌」『大分県立芸術会館研究紀要』1（2002.9）／『創作版画誌の系譜』（加治）

古川義光（ふるかわ・よしみつ）

1935（昭和10）年5月、台北で立石鐵臣・西川満・宮田弥太郎らによって結成された「創作版画会」に参加。作品は未見。【文献】西山純子「華麗島の創作版画—一九三〇年代・台湾—」『採蓮』7（千葉市美術館 2004）（三木）

古川龍生（ふるかわ・りゅうせい） 1893～1968

1893（明治26）年6月10日栃木県下都賀郡桑村大字羽川（現・小山市羽川）に生まれる。本名龍夫。1912年逗子開成中学校に進む。在学中竹久夢二に傾倒して自刻自摺の木版画制作を始め、私家版の詩画集を編み、また『野州新聞』や『淑女画報』に投稿を行う。1917年同校を卒業。日本画を専攻することと絵を売らないことを条件に父から美校受験を許され、川端画学校を経て1918年に東京美術学校日本画家予科入学。1920年本科に進み、川端画学校でも学んだ結城素明の教室に入る。1924年に美校卒業。横浜市本牧中学校で図画を教えるかたわら、中学時代から親しんだ版画の道を選ぶ。西田武雄の指導でエッチングも試みたが、同年の第6回日本創作版画協会展には木版画（《花》《少女石蹴図》《農夫星野三吉氏一家》）を出品、入選して以後木版画に専心した。同展には第7回展以降も出品を続けて第9回展より会友となり、続く日本版画協会展でも会友として1931年の第1回展より出品。翌年の第2回展から会員となり、第5回展まで連続出品した。日本版画協会のほか春陽会にも属し、1927年の第

5 回展で《村の学校》が初入選。以後 1936 年の第 14 回展まで出品を続けた。展覧会ではほかに、美校の日本画家卒業生による東台邦画会（1927 年の第 2 回展～第 4 回展、1932 年の第 7 回展）への出品、ふたつの国際オリンピック芸術競技（1932 年のロサンゼルス大会、1936 年のベルリン大会）への参加が知られる。頒布会では 1929 年に日本版画社が刊行した『自刻自摺大東京新景版画集』の第四として《宮城の雨》を制作。1930 年にも創作版画倶楽部が主催した『帝都二十五景創作版画会』および『昭和五年創作版画傑作集 第一集 春陽会出品作品の内』への参加が記録に残るが未確認。創作版画誌への掲載はわずかながら『HANGA』13 輯（1928.3）と『版芸術』第 4 号～第 6 号（1932.7～9）がある。最初期のエピナール版画との類似が指摘される素朴な作風は次第に洗練され、精巧な彫りと、主版から自律して存在する水々しい色版による独自の構成に展開、とりわけ 1933 年の第 11 回春陽会展で発表した 9 点からなる連作『昆虫戯画卷』（「平和篇」「争闘篇」「新生篇」各 3 点）は擬人化した昆虫たちの世界を詩情豊かに描き、翌年パリ装飾美術館で開催された「日本現代版画展」に他の 6 点とともに出品され、好評を得て代表作となった。1936 年に敗血症となり本牧中学校を退職。翌年から 1951 年まで病や故郷への疎開（ただし 1942 年および 1944 年の日本版画協会を介した海軍省への作品献納、1944 年の第 13 回日本版画協会展への出品がある）。1951 年によく制作を再開して同年の第 28 回春陽会展に出品。翌年には第 20 回日本版画協会展に出品して両会への復帰を果し、以後出品を続けた。1953 年上京。戦後は郷里でふれた野草や田園風景に取材、1950 年代終盤からは街景を多く描き、造形は版木を黒く塗り、白線を奔放に彫り出す陰刻の手法による半抽象構成に展開した。とりわけ街の連作は高評を得て、海外展や東京国際版画ビエンナーレ展にも出品されている。1961 年に中学時代を過ごした神奈川県三浦郡葉山町へ転居、以後は海浜風景にも取材した。1968（昭和 43）年 5 月 23 日葉山町の自宅で逝去。作品をほとんど売らず、版の効果は大切にしたが摺数はきわめて少なく、生涯高い画格を失ななかった特異な作家であった。【文献】古川龍生「エッチングの思ひ出」『エッチング』43 / 『古川龍生版画集』（古川明 1973.11） / 『三彩』318（特集：古川龍生 1974.6） / 石田泰弘「一創作版画家の記録（上）古川龍生」『浮世絵芸術』43（1975.1） / 同「一創作版画家の記録（下-1）古川龍生」『浮世絵芸術』48（1976.5） / 竹山博彦「行為としての芸術—古川龍生論ノート—」『栃木県立美術館紀要 No.4 1976 年度』 / 久保貞次郎編『田園抒情 古川龍生木版全集』（叢文社 1980） / 『大正期美術展覧会出品目録』（東京文化財研究所 2002） / 丹尾安典「弄蘭莊愚記」「弄蘭莊醉眼記」『一寸』19・20（学藝書院 2004.8.11） / 『栃木県立美術館所蔵 古川龍生展』図録（栃木県立美術館 2006） / 『昭和期美術展覧会出品目録 戦前編』（東京文化財研究所 2006） / 『創作版画誌の系譜』（西山）

古塚三郎（ふるづか・さぶろう）

1922（大正 11）年の神戸弦月画会主催の創作版画展（2.23～26 神戸・三宮三〇九番館）に木版画《スケッチ》を出品。出品時は神戸に住む。【文献】『創作版画展覧会目録』（1922）（三木）

古谷真二（ふるや・しんじ）

慶応義塾普通部在学時、美術部に所属（1 年先輩に駒井哲郎が在部）。普通部 3 年生の 1936 年 11 月 8 日同校で開催された生徒作品展覧会にエッチング《教会》を出品し、『エッチング』50 号（1936.12）に同作品が掲載される。また 4 年生となった翌 1937 年 10 月 17・18 日に開催の同校美術部エッチング展に《ゴムの樹》を出品し、西田武雄から「エッチング本来の形式を充分理解した逸品で一中学生の作品とは思えない」と高い評価を受け、再び『エッチング』60 号（1937.10）に同作品が掲載され（図版の作者名は「古屋真二」とあるが、「古谷真二」の誤記と思われる）、慶應義塾普通部の『普通部會誌』28 号（1936）・29 号（1937）の口絵に上記 2 点が使われている。29 号巻末の名簿によると古谷の住所は「京橋区槇町」。また『三田評論』489 号（1938.5）掲載の卒業生名簿には「普通部修了（4 年）」とある。因みに駒井哲郎も同年普通部を卒業（5 年）し、東京美術学校油画科予科へ進学している。【文献】『エッチング』50・60 / 慶應義塾大学三田メディアセンターレファレンス照会（樋口）

古屋台（苔）軒（ふるや・たいけん）1894～1941

浅草橋場に生れる。巽画会で活躍し、のちに川合玉堂に師事。1928（昭和 3）年には玉堂門下で戊辰会を結成。文展・帝展にも入選。1921 年から 22 年に渡辺版画店から版画 4 点（《旅芸人》《越後獅子》《警女》《源氏節》）を発行。内、横絵の《旅芸人》《越後獅子》《源氏節》には雅号「台軒」を使用している。肉筆の日本画には「苔軒」を使って区別したものとみられる。従来生没年未詳とされて来たが、『季刊美術』（1-1 1942）掲載、「前年」の「物故作家」欄に「八月七日、古屋苔軒画伯が永らくの病気で逝去した享年四八。」とあって、ここから生没年を特定した。なお、大正から昭和にかけては、雑誌や単行本の挿絵も描いている。例えば『現代大衆文学全集・平山蘆江』（平凡社 1928）がある。【文献】「古屋台軒」『浮世絵大辞典』（国際浮世絵学会編 東京堂 2008）（岩切）

【へ】

別井鶴治（べつい・つるじ）

1922（大正 11）年 2 月の第 4 回日本創作版画協会展に木版画《夜の静物》が入選。作品図版は 4 月の『版画』第 1 巻第 3 号（版画社）に掲載された。出品時は東京に住む。また、翌 1923 年 3 月には『詩と版画』第 2 輯（詩と版画社）に木版画《降雪の日》を発表している。【文献】『日本創作版画協会第四回展覧会目録』（1922） / 『創作版画誌の系譜』（三木）

紅 吉（べによし）⇒尾竹紅吉（おたけ・べによし）

逸見 享（へんみ・たかし）1895～1944

1895（明治 23）年 4 月 23 日和歌山県和歌山市小松原通 7 丁目に生まれる。1913 年市立和歌山商業学校を卒業し、上京。横浜の商会に入った後、小林富次郎商店（後のライオン歯磨本舗小林商店）に勤務。最初は会計部員、のち広告部員・意匠部員となる。1915 年に開かれた田中恭吉遺作展（12.3～5 日比谷美術館）に感銘を受け、翌年から版画を始める。なお、逸見は田中より 3 歳年少で生家が近く、中学通いの田中を知るといふ（「上京前後の思出」『エッチング』94）。また、1916 年にはライオン歯磨

本舗に入ってきた詩人大手拓次(1887～1934)を知り、交友が始まる。1917年に拓次らと詩歌と版画誌『異香』(1.5 異香社)を刊行し、短歌と木版の扉絵を発表。翌1918年には拓次と二人で詩と版画誌『あをちどり』第1輯「黄色い帽子の蛇」(4.17 あをちどり舎)を刊行し、詩4篇と木版画《地の聲》(1917)《間に芽をふくもの》(1917)《自像》(1918)など5点、木版による表紙絵・裏表紙絵・扉絵を発表。その後、1924年にも拓次との詩と版画誌『詩情』第1輯(7.1 詩情社)を刊行し、詩3篇・小文と木版画《海近く》《夜の部屋》、木版による表紙絵・裏表紙絵・扉絵を発表したが、いずれも創刊号のみで終わっている。公募展へは、1919年に始まる日本創作版画協会展に出品し、第1回に《森田氏の顔》(1918)《幸福な海女の群》が入選。その後も第3回展(1921)と第5回展(1923)をのぞき、1929年の第9回展まで毎回出品。その間、1927年に会員に推挙された。また、1928年からは春陽会展にも出品し、同年の第6回展に《食卓》《上海風景》《静物》が入選。その後も同展の常連として、第9回展(1931)をのぞき、1934年の第12回展まで毎回出品している。一方、地方展・創作版画誌などへも積極的に参加し、1922年の神戸弦月画会主催創作版画展(2.23～26 神戸・三宮三〇九番館)に《森田氏の像》《顔》(1918)《幸福な海女の群》(1919)《孝陵へゆく道》(1920)など10点を出品。その後、神戸の山口久吉の主宰する『HANGA』の第2輯(1924.5)に《春近く》、第7輯(1925.10)の表紙絵として《風景》を発表。1924年10月頃には、旭正秀・恩地孝四郎・平塚運一・藤森静雄らの「詩と版画社」同人となり、同社の第1回展(10.15～20 京都・丸山医院)に《暮る、雪》《如月》を出品。『詩と版画』第9輯(1925.1)に《橋畔》、第10輯(1925.3)に《くさむら》ほか、詩2篇と「私の版画作程」(自作版画図版3点入)、第11輯(1925.5)に木版による表紙・裏表紙・扉・カット、第13輯(1925.8)に《旅情》を発表。『詩と版画』休刊後は、1927年に創刊された『風』(主宰：澤田伊四郎)の第1号(10.1)に《風景》、第2号(12.1)に《薄暮の詩人》、第4号(1928.7.1)に《食卓》、『風』再刊第1号(1929.4)に《街角》と作品解説、再刊第2号(1929.5)に詩4篇と「詩壇を聞く」、再刊第3号(1929.6)に《風景》を発表している。また、1928年には恩地・平塚・藤森・前川千帆ら7名と「卓上社」を結成し、第1回展(10.19～23 日本橋・丸善)に《東京風景(市ヶ谷見附)》《街角(上海)》を出品。その後も第2回展(1929.10.22～27 日本橋・丸善)、第3回展(1930.11.2～7 銀座・伊東屋 きつつき同人との合同展)、卓上社版画工芸作品展(1932.6.1～5 京都か・大丸)を開催した。1929年1月には中島重太郎が「卓上社」同人たちと諮り、『新東京百景』頒布のために「創作版画倶楽部」を創立し、同年から1932年にかけて全100点を頒布したが、その内の《植物園》(1929)《帝国ホテル》(1930)《聖橋》(1930)《本郷元町展望公園》(1931)など13点を制作。同倶楽部の発行する『版画CULB』(1929.4～1932.3 全16冊)に《植物園小景》(1-4)を発表したほか、「作家言」(1-1、1-4、1-6、2-2、3-4)「制作日記」(1-4)「帰野漫筆」(2-1)「CULB紙上展 第6回〔選評〕」(2-2)「創作版画展初期の思出」(4-1)「〔前川千帆〕第二野外小品礼讃」(4-2)などを執筆。また、「アトリエめぐり 5 逸見享氏」〔文・山口源か〕(1-6)の記事が掲載された。1931年の日本版画協会の結成には、会員として参加。第1回展に《ひのみ》《海村風景》《公園》《東京府美術館》を出品。その後も第8・9回展(1939・1940)、第11回展(1942)を除き、1943

年の第12回展まで出品。また、1934年にパリで開かれた「日本現代版画とその源流展」(装飾美術館)に《海辺の朝》(1929)など7点を出品したほか、1936年にジュネーブで開かれた「日本の古版画と日本現代版画展」(市博物館、マドリッドに巡回)、1936年から1937年にかけて欧米8都市を巡回した「日本現代版画展」、1942年に上海で開かれた「日本版画協会展」などにも出品。その間、1936年から1940年までか、協会理事を務め、1936年に始まる「日本版画協会カレンダー」の頒布では、1936年10月・1937年5月・1938年12月・1939年6月・1940年11月・1941年7月のカレンダーを担当。また1938年に始まる「新日本百景版画」の頒布では、《潮来晩秋》(1939)を制作した。一方、友人であった大手拓次が亡くなった1934年からは、その遺稿の整理を夫人と共に始め、1936年12月に刊行された拓次の第一詩集『藍色の蓑』(アルス)の編集・装幀を担当。その後も詩画集『蛇の花嫁』(龍星閣 1940)、訳詩集『異国の香』(龍星閣 1941)、遺稿集『詩日記と手紙』(龍星閣 1943)の編輯を担当し、拓次の再評価に大きな影響を与えた。1942年にはアオイ書房の十周年記念して企画された詩と版画集『書窓版画帖十連聚 其七 水韻譜』(アオイ書房)を刊行したが、版画としては最後のまとまった仕事となった。1943年頃から体調を崩し、1944(昭和19)年10月19日東京都杉並区清水町で逝去。1947年の第15回日本版画協会展に遺作《海村風景》(1931)など24点が特陳された。その作品の多くは郷里の和歌山県立近代美術館に収蔵されている。【文献】逸見享「上京前後の思出」『エッチング』94／『恩地孝四郎・田中恭吉・逸見享版画展』図録(和歌山県立近代美術館 1981)／『創作版画誌の系譜』(三木)